

I-5

手話言語話者一言語的・文化的少数派という視点

テーマI「フィンランドを構成する人々」の五番目として手話言語とその話者を取り上げることになります。手話や手話話者は世界中に存在しますので、私たちが勉強する必要があると思います。

1. 「障害者」の表記について

「障害者」については「障害者」あるいは「障がい者」などと表記すべきだという意見があります。ただし、「碍」という字にはやはり否定的な意味が含まれており、「害」の代わりに使うという点においてはあまり大きな意味はないという考え方もあります。一方、「障がい者」とする場合には、なぜ「障」の方は漢字のままかまわないのかという疑問も残ります。漢字表記に意味はないとは思いますが、むしろ「障害者」というときに、「障害をおもちの方々」ではなく「社会の側からもたらされた障害に直面している人々」という発想の転換をすることの方が重要な気がします。「全日本ろうあ連盟」のサイトでも「聴覚障害者」という表記を使用しているようですので、今回の資料では「障害者」という表記を採用します。

2. 「ろう者」と「難聴者」

本資料には「ろう者」と「難聴者」という用語が登場しますが、両者の区別については次の引用を参考にしてください。ただし、この引用はあくまでも「聴力」のみに注目したもので、「ろう者」をどのように理解すべきかについては、資料の中でみていきます。

聴覚障害は聞こえる音のレベルをデシベル (dBHL) によって分類するのが一般的である。世界保健機構 (WHO) によれば、聴覚障害は軽度 (26~40 デシベル)、中等度 (41~55 デシベル)、やや高度 (56~70 デシベル)、重度 (71~90 デシベル)、非常に高度 (91 デシベル以上) というレベルに分類される (松岡 2014: 55)。一般的に「難聴」は、ある程度の聴力があるが聞こえにくいことを意味すると考えられ、ろう者は医学的には両耳の聴力が 100 デシベル以上の最重度聴覚障害者をさすともされる。(上倉・吉田, 2021, pp.4)

引用中に出てくる「松岡 (2014: 55)」とは次の文献です。

松岡克尚, 2014. 「聴覚障害と技術支援」, 小川喜道・杉野昭博編著『よくわかる障害学』, ミネルヴァ書房, 54-57 ページ.

3. 参考文献の紹介

上の 2. の引用は次の論文から採ったものです。

参考文献

上倉あゆ子・吉田欣吾, 2021. 「子どもの十全な成長とリベラルな多文化主義 (i) — 北欧における

手話を取り巻く環境の変化をきっかけとして、『東海大学紀要文化社会学部』第6号。

なお、この論文の続きは『東海大学紀要文化社会学部』第7号に掲載されています。どちらも次のURLからダウンロードできます。

「東海大学紀要 文化社会学部」『東海大学』

<<https://www.u-tokai.ac.jp/ud-cultural-and-social-studies/kiyou/>>

【1】手話言語は手や身体部位を使って産出され、視覚により受信される

Kaikkia viittomakieliä yhdistää se, että niitä tuotetaan pääasiassa käsien ja muiden kehon osien liikkeillä ja vastaanotetaan näköaistilla. Muilta ominaisuuksiltaan viittomakielet ovat verrannollisia maailman puhuttuihin kieliin.

■ 語句・文法

viittoma-kieliä「手話言語を」[複分]<-kieli (viittoma「(手話言語における)サイン」<viittoa) / yhdistää「結びつける」<yksi/se, että ~「~だということが」(この節が文全体の主部になっています) / tuotetaan「作り出される」受現 <tuottaa / pää-asiassa「おもに」[内]<-asia / kehon「身体の」[属]<keho / liikkeillä「動きにより」[複接]<liike <liikkua / vastaan-otetaan「受け取られる」受現 <-ottaa / näkö-aistilla「視覚により」[接]<-aisti / muilta ominaisuuksiltaan「他の特徴の点からすると」(muilta [複奪]<muu、ominaisuuksiltaan [複奪]+ 複 3 所接 <ominaisuus <ominainen) / verrannollisia「比較できるような、匹敵するような」[複分]<verrannollinen <verranto <verrata / puhuttuihin kieliin「話される言語へ、音声言語へ」[複入]<puhuttu kieli (puhuttu 受過分 <puhua)

● フィンランド語理解のための訳例

すべての|手話言語を|結びつける|[ことが|それらを|作り出される|おもに|手の|そして|他の|身体の|部分の|動きにより|そして|受け取られる|視覚により]。他の|特徴からすると|手話言語は|比較できる|世界の|話される|言語へ。

◎ 意訳

すべての手話言語を結びつけるのは、それらがおもに手や他の身体部位により産出され、視覚により受信されるという点である。他の特徴からすれば、手話言語は世界の音声言語に匹敵するものである。

★ 補足

手話言語が「言語」であるというのは何らかの比喩などではありません。手話言語が「言語」であるとする主張は、おもに言語学と脳神経学の研究成果にもとづいています。

言語の重要な特徴の一つを「構造の二重性」あるいは「二重分節性」と呼ぶことがあります。これは、ごく簡単にいえば、有限で、しかも少数の要素である「音素」から「形態素」(ほぼ単語に相当し

ます)が作られ、さらに形態素が結びついて無限の「文」が作られます(日本語の音素数は 30 にも満ちませんが、それを使って生まれる表現は無限です)。逆にいえば「文」は「形態素」に、そして「形態素」は「音素」に分解できます。これが人間の言語のもつ最大の特徴だといえますが、音声言語だけではなく手話言語もこの「構造の二重性」あるいは「二重分節性」という特徴を共有しています。この点を含め言語の備えるべき本質的な特徴という点から、言語学では手話言語を「言語」として扱っています。

一方、脳神経学という学問があるようです。この研究によれば、言語を使用するときには脳の特定の部分が活発に働いていることがわかります。そして、言語を担当する脳の部分と、たとえばジェスチャーを担当する部分は異なるようです。そのため、何らかの理由で脳が損傷を受けると「言語は話せるがジェスチャーはうまくできない」とか、逆に「ジェスチャーは今まで通り使えるが、言葉が出てこない」といったことが起こるそうです。そして音声言語と手話言語では、それらを使用しているときに脳の同じ部分が活性化するそうです。その結果、脳に損傷を受けた人の中には「手話言語は今まで通り話せるけど、ジェスチャーがうまく出てこない」、あるいは、その逆のことが起こることがあるようです。結果として、脳についての研究によれば、音声言語と手話言語との間には大きな違いがないということです。

以上で簡単にお話ししたように、手話言語が音声言語と同じ特徴を共有する「言語」であるという考え方が、言語学や脳神経学の世界では常識になっているといえます。つまり、「音声を使用する」ということは「言語」であるための必要条件ではありません。

【2】プラトンもろう者の言語に言及している

Yksi ensimmäisistä maininnoista kuurojen käyttämästä äännettömästä kielestä on peräisin Platonilta (427–347 eaa.), joka dialogissaan Kratylos pohtii kielen ja sen merkkien luonnetta.

■ 語句・文法

ensimmäisistä maininnoista「最初の言及のうち」[複出] < ensimmäinen maininta / käyttämästä「使うような」[出] < käyttämä 動分 < käyttää / äännettömästä kielestä「音のない言語について」[出] < äännetön kieli (äännetön < ääni) / peräisin「～起源で」 / Platonilta「プラトンから」[奪] < Platon / eaa. = ennen ajan-laskun alkua「紀元前」 / dialogissaan Kratylo「(自らの)対話篇『クラテュロス』において」(dialogissaan[内]+ 単 3 所接 < dialogi) / pohtia「検討する」 / merkkien「記号の」[複属] < merkki(「記号」とは「表象」=音声言語であれば「音」と「意味」から成り立つと考えられています)

● フィンランド語理解のための訳例

[一つは|最初の|言及のうち|もろう者たちの|使うような|音のない|言語について]|起源である|プラトンから(紀元前 427-347)、|それは|自らの対話編『クラテュロス』において|検討する|言語の|そして|その|記号の|性質を。

◎意訳

ろう者たちの使う音のない言語に関する最初の言及のうちの一つはプラトン(紀元前 427-347)によるものであり、彼は対話編『クラテュロス』において言語やその記号の性質について検討している。

【3】現在の手話言語の多くは 1700 年代に起源をもつ

Kuuroille ihmisille ensimmäisiä mahdollisuuksia kokoontua yhteen riittävän suurissa joukoissa kehkeytyi 1700-luvulta alkaen, kun ensimmäisiä kuurojen kouluja perustettiin Eurooppaan ja Amerikkaan. Näihin hetkiin ajoitetaan myös ensimmäisten modernien viittomakielten synty.

■ 語句・文法

ensimmäisiä mahdollisuuksia kokoontua yhteen 「一つに集まる最初の機会」(ensimmäisiä mahdollisuuksia [複分] < ensimmäinen mahdollisuus、yhteen [入] < yksi) / riittävän suurissa joukoissa 「十分に大きな集団の中で」(riittävän [属]=[副] < riittävä 能現分 < riittää、suurissa joukoissa [複内] < suuri joukko) / kehkeytyä 「発展する、形作られる、生まれる」 / alkaen 「～以来、～以降」(+ [出] ~ [奪]) / perustettiin 「設立された」受現 < perustaa / näihin hetkiin 「これらの瞬間へ、これらの時代へ」[複入] < tämä hetki / ajoitetaan 「時代・時期を特定される」受現 < ajoittaa < aika / modernien viittoma-kielten 「現代の手話言語の」[複属] < moderni viittoma-kieli

● フィンランド語理解のための訳例

ろうの|人々へ|[最初の|可能性は|集まる|一つへ|十分に|大きな|集団において]|生まれた|1700 年代から|以降に、|[ときに|最初の|ろう者たちの|学校を|設立された|ヨーロッパへ|そして|アメリカへ]。これらの時代へ|特定される|また|最初の|現代の|手話言語の|誕生を。

◎意訳

ろうの人々にとって十分に大きな集団として集まる最初の機会というものは、ヨーロッパやアメリカに最初のろう学校が設立された 1700 年代以降において生まれてきた。この時期に最初の近代的な手話言語も誕生したのだと考えられている。

★補足

家族にろう者がいると「ホームサイン」というものが生まれるそうです。そして、それぞれのホームサインを使うろう者たちがろう学校へ集まることで、自然な形で手話言語が誕生したといわれています。その意味で手話言語の誕生や継承にとっては「学校」という場所のもつ意味が非常に大きいといえます。

【4】手話言語の歴史はろう者と密接に結びつく

Viittomakieliä käyttävät tänä päivänä sekä kuurot että kuulevat henkilöt. Viittomakielten historia kytkeytyy kuitenkin kuuroihin.

■ 語句・文法

sekä ~ että ... 「～と…と両方とも」／kuurot 「ろうの」 [複主] < kuuro / kuulevat 「聞こえるような、聴者の」 [複主] < kuuleva 能現分 < kuulla / kytkeytyä 「結ぶついている、接続されている」 < kytkeä / kuuroihin 「ろう者たちへ」 [複入] < kuuro

● フィンランド語理解のための訳例

手話言語を|使う|今日では|ろうの|そして|聴者の|人物たちが。手話言語の|歴史は|結びつく|しかしながら|ろう者たちへ。

◎ 意訳

手話言語は今日ではろう者と聴者の両方によって使用されている。しかし、手話言語の歴史はろう者たちと結びつくものである。

【5】手話言語話者の共同体はろう者、聴者などさまざまな人々から構成される

Viittomakielisistä osa oppii viittomakielen jo kotona kuuroilta vanhemmiltaan. Enemmistö kuuroista syntyy kuitenkin kuuleville vanhemmille, joille avautuu lapsen kautta mahdollisuus oppia uusi kieli. Myös kuulolaitetta tai sisäkorvaistutetta käyttävät voivat olla viittomakielisiä. Viittomakielisyys ei riipu kuulon asteesta, vaan ratkaisevaa on viittomakielen käyttö ja yhteisöön samaistuminen.

■ 語句・文法

viittoma-kielisistä 「手話言語話者たちのうち」 [複出] < kielenen / vanhemmiltaan 「(自らの) 両親から」 [複奪] + 単 3 所接 < vanhempi 比 < vanha (vanha の比較級 vanhempi の複数形はしばしば「両親」という意味で使われます) / enemmistö 「多数派は」 ⇔ vähemmistö / kuuleville vanhemmille 「聞こえる両親へ、聴者の両親へ」 (kuuleville [複向] < kuuleva 能現分 < kuulla) / joille 「それらに、それらにとって」 [複向] < joka / avautua 「開ける、開かれる」 < avata / kuulolaitetta 「補聴器を」 [分] < -laite / sisä-korva-istutetta 「人工内耳を(内耳インプラントを)」 [分] < -istute < istuttaa < istua / käyttävät 「使用する人たちは」 [複主] < käyttävä 能現分 < käyttää / viittoma-kielisyys 「手話言語話者であることは」 < -kielinen / ei riipu 「依存しない、左右されない」 単 3 現否 < riippua (+ [出]) / kuulon asteesta 「聴力の度合いに」 (asteesta [出] < aste) / ratkaisevaa 「決定的な」 [分] < ratkaiseva 能現分 < ratkaista / yhteisöön 「共同体へ、コミュニティーへ」 [入] < yhteisö < yksi / samaistuminen 「自己同一化すること、自分がその一員だと考えること」 動名 < samaistua < samaistaa < samainen < sama

● フィンランド語理解のための訳例

手話言語話者たちのうち|一部は|覚える|手話言語を|すでに|家で|ろうの|両親から。多数派は|ろう者たちのうち|生まれる|しかしながら|聞こえるような|両親へ、|それらにとって|開かれる|子どもの|通して|機会が|覚える|新しい|言語を。また|補聴器を|あるいは|人工内耳を|利用する人々は|ありうる|である|手話言語話者。手話言語話者であること ha |依存しない|聴力の|度合いに、|そうではなく|決定的な|である|手話言語の|使用が|そして|共同体へ|自己同一化することが。

◎意訳

手話言語話者たちのうち一部は、ろう者である両親からすでに家庭において手話言語を習得する。しかし、ろう者たちの大多数は聴者の両親のもとへ生まれ、それにより両親たちにとっては子どもを通じて新たな言語を学ぶ機会が開けることになる。補聴器や人工内耳を使用する人々も手話言語話者である可能性がある。ただし、手話言語話者であるかどうかは聴力の程度に左右されるものではなく、決定的なことは手話を使用することと〈手話言語話者の〉共同体の一員だと自らをみなすことである。

★補足

手話言語がろう者と強く結びつくものだという一方で、聴者の中にも手話言語を話す、あるいは母語とする人が存在します。なお、人工内耳については【52】以降で少し詳しくみていく予定です。

【6】「コーダ」や「ソーダ」も手話話者

Kuurojen vanhempien kuulevista lapsista käytetään myös englannin kielestä poimittua lyhenne-sanaa CODA tai coda (Children of Deaf Adults). Kuurojen kuulevista sisaruksista käytetään nimitystä SODA tai soda (Siblings of Deaf Adults).

■語句・文法

vanhempien「両親の」[複属]< vanhempi 比 < vanha/kuulevista lapsista「聞こえる子どもたちについて」[複出]< kuuleva lapsi/käytetään「使われる」受現 < käyttää/poimittua「摘まれたような」[分]< poimittu 受過分 < poimia/lyhenne-sanaa「略語を」[分]< -sana (lyhenne < lyhentää < lyhetä < lyhyt)/sisaruksista「兄弟姉妹について」[複出]< sisarus

●フィンランド語理解のための訳例

ろうである|両親の|聞こえるような|子どもたちについて|使われる|また|英語から|摘まれたような|略語を|CODA|あるいは|coda (Children of Deaf Adults)。ろう者たちの|聞こえるような|兄弟姉妹について|使われる|名称を|SODA|あるいは|soda (Siblings of Deaf Adults)。

◎意訳

ろう者である親をもつ聴者である子どもについては、また英語から採られた「コーダ」(ろうである成人の子どもたち)という略語が使用される。〈同じく〉ろう者にとっての聴者である兄弟姉妹については「ソーダ」(ろうである成人の兄弟姉妹)という名称が使用される。

【7】フィンランドには二つの手話言語が存在する

Suomessa on käytössä kaksi viittomakieltä, suomalainen ja suomenruotsalainen viittomakieli. Suomenruotsalainen viittomakieli on Unescon kriteereiden mukaan vakavasti uhanalainen kieli ja se on vaarassa kadota.

■ 語句・文法

on käytössä「使用される」(käytössä [内] < käyttö < käyttää) / kriteereiden「基準の」[複属] < kriteeri / vakavasti uhanalainen「重大な危機に瀕している」(英語では”severely endangered”)に相当します。ユネスコの「危機言語リスト」については資料 I-4の【27】と「★補足」を参照してください。) / vaarassa「危険の中に」[内] < vaara / kadota「消える、消滅する」

● フィンランド語理解のための訳例

フィンランドでは|使われている|二つの|手話言語が、|フィンランド<手話言語>|そして|スウェーデン語系フィンランド|手話言語。スウェーデン語系フィンランド|手話言語は|である|ユネスコの|基準の|よれば|重大に|脅威に瀕している|言語|そして|それは|ある|[危険の中に|消える]。

◎ 意識

フィンランドではフィンランド手話とスウェーデン語系フィンランド手話という二つの手話言語が使われている。スウェーデン語系フィンランド手話は、ユネスコの基準によれば重大な危機に瀕している言語であり、それは消滅の危機の中にある。

★ 補足

手話言語になぜ「スウェーデン語系」といった音声言語にしたがって区別されるものがあるのか、不思議に思うところだと思います。これについては少し詳しい説明が次の書籍にありますので、興味のある方は参考にしてください。

□ 参考図書

吉田欣吾. 2008. 「第 14 章 フィンランドにおける手話と学校」. 『「言の葉」のフィンランド—言語地域研究序論』. 東海大学出版会. 331-360 ページ.

【8】手話言語話者たちは言語的・文化的集団である

Viittomakieliset ovat kieli- ja kulttuuriryhmä, jonka ydinjoukon muodostavat äidinkielenään viittomakieltä käyttävät kuurot ja huonokuuloiset. Viittomakieli voi kuitenkin olla henkilön äidinkieli myös silloin, kun ainakin toinen vanhemmista tai joku vanhemmista sisaruksista on viittomakielinen ja viittomakieltä on käytetty lapsen kanssa syntymästä lähtien. Suomen Kuurojen liiton mukaan Suomessa on noin 10 000–14 000 viittomakielentaitoista henkilöä, joista noin 4 000–5 000 on kuuroja.¹⁴

◇原注(文中で言及されている参考文献など)

14 <https://oikeusministerio.fi/viittomakielet>

■ 語句・文法

ydin-joukon「中核集団を」[属対]< -joukko / muodostaa「形成する」< muoto / äidin-kielenään「(自らの)母語として」[様]+ 複₃ 所接 < -kieli / käyttävät「使うような」[複主]< käyttävä 能現分 < käyttää / huono-kuuloiset「難聴者たち」[複主]< -kuuloinen < kuulo < kuulla / silloin, kun ~「~のときに、~の場合に」 / ainakin「少なくとも」 / toinen「一方が」 / vanhemmista「両親のうち」[複出]< vanhempi 比 < vanha / joku「誰か」 / vanhemmista sisaruksista「年上の兄弟姉妹のうち」[複出]< vanhempi sisarus (vanhempi 比 < vanha) / on käytetty「使われてきている」受完 < käyttää / syntymästä lähtien「誕生以降」 / Suomen Kuurojen liitto「フィンランドろう者協会」(36の下部組織をまとめる全国組織で、1905年に設立されているようです。) / viittoma-kielen-taitoista「手話言語能力のあるような」[分]< -taitoinen < taito < taitaa / joista「それらのうち」[複出]< joka

● フィンランド語理解のための訳例

手話言語話者たちは|である|言語・文化集団、|その|中核集団を|形成する|(自らの)母語として|手話言語を|使用するような|ろう者たち|そして|難聴者たち。手話言語は|ありうる|しかしながら|である|人物の|母語|また|[<次]の場合に|すくなくとも|一人が|両親のうち|あるいは|誰かが|年上の|兄弟姉妹のうち|である|手話言語話者|そして|手話言語を|使われてきている|子どもの|一緒に|誕生から|以降に。フィンランドの|ろう者たちの|協会の|よれば|フィンランドに|いる|約|10000 から 14000|手話言語能力のあるような|人物が、|それらのうち|約|4000 から 5000 は|ろう者である。

◎ 意訳

手話言語話者たちは言語的・文化的集団であり、その中核をなすのは母語として手話言語を使うろう者や難聴者である。しかし、両親のうち少なくとも一方が、あるいは年長の兄弟姉妹のいずれかが手話話者であり、生まれて以降に子どもと手話が使われているのであれば、手話言語は<聴者であったとしても>個人の母語となりうる。「フィンランドろう者協会」によれば、フィンランドには手話言語能力を有する人が約1万から1万4千名おり、そのうち約4千から5千名がろう者とのことである。

【9】手話言語を母語とする人々はフィンランドにどのくらい存在するのか

Äidinkielenään suomalaista viittomakieltä käyttäviä on noin 5 500, ja heistä kuuroja on noin 3 000. Osa Suomen viittomakielisistä on suomenruotsalaisia. He käyttävät suomenruotsalaista viittomakieltä ja asuvat pääasiassa Etelä-Suomessa ja Pohjanmaalla. Kuuroja heistä on noin 100.¹⁵

◇原注(文中で言及されている参考文献など)

15 <https://kuurojenliitto.fi/viittomakieliset>

■ 語句・文法

käyttäviä「使う人々」[複分]< käyttävä 能現分 < käyttää/Pohjan-maa「ポフヤンマー地方(オストロボスニア地方)」(ほぼフィンランドの中部をさします)

● フィンランド語理解のための訳例

(自らの)母語として|フィンランドの|手話言語を|使う人たちは|である|約|5500、|そして|彼らのうち|ろう者は|である|約|3000。[一部は|フィンランドの|手話言語話者たちのうち]である|スウェーデン語系フィンランド人。彼らは|使う|スウェーデン語系フィンランドの|手話言語を|そして|住む|おもに|南フィンランドに|そして|Pohjan-maa 地方に。ろう者は|彼らのうち|である|約|100。

◎ 意訳

母語としてフィンランド手話を使う人々は約 5500 名だが、彼らのうちろう者は約 3000 名である。フィンランドの手話言語話者たちのうち一部はスウェーデン語系フィンランド人である。彼らはスウェーデン語系フィンランド手話を使用し、おもにフィンランド南部と Pohjanmaa 地方に居住している。彼らのうちろう者は約 100 名となっている。

【10】フィンランド手話言語の歴史は Malm という人物にさかのぼる

Suomalaisen viittomakielen historia juontaa juurensa 1800-luvun puoliväliin, kun Ruotsissa opiskellut kuuro Carl Oscar Malm perusti ensimmäisen kuurojen koulun Porvooseen. Malmin käyttämä kieli levisi kuurojen keskuuteen, mutta kuurojen opetuksessa alettiin suosia puhetta ja huulilukemisen tärkeyttä korostavaa oralismia. Viittomakielen käyttö kouluissa kiellettiin jopa rangaistuksen uhalla. Näin kielestä tuli kuurojen keskenään käyttämä salakieli.

■ 語句・文法

juontaa juurensa「～起源である」(juurensa [属対]+ 単 3 所接 < juuri「根、ルーツ」)。この表現は出格と結びつくということが辞書には書かれていますが、ここでは puoli-väliin「中頃へ」という入格と結びついていますので、少し不思議です。「(起源は)～へさかのぼる」と考えてもよいのかもしれませんが。) / opiskellut「勉強したような」能過分 < opiskella / Carl Oscar Malm (1826-1863) はフィンランドで最初のろう学校を設立した人物で、自身もろう者でした。「フィンランド手話言語の父」とも呼ばれるようです。Malm はスウェーデンでスウェーデン手話言語を学んだため、フィンランド手話言語はスウェーデン語手話言語と系統的に近い関係にあります。 / perusti「設立した」単 3 過 < perustaa / Porvooseen「Porvoo へ」[入]< Porvoo (Helsinki から 50 キロメートルほど東に位置する都市) / käyttämä「使ったような」動分 < käyttää / levisi「広まった」単 3 過 < levitä / keskuuteen「間へ」⇒ keskuudessa, keskuudesta / opetuksessa「教育において」[内]< opetus / alettiin「始められた」受過 < alkaa / suosia「優遇する、優先する、好む」 / puhetta「(音声での)発話を、(音声を使った)話すことを」[分]< puhe < puhua / huulilta-lukemisen「読唇の(唇から読

むことの) (huuililta [複奪] < huuli, lukemisen [属] < lukeminen 動名 < lukea) / tärkeyttä 「重要性を」 [分] < tärkeys < tärkeä / korostavaa 「強調するような」 [分] < korostava 能現分 < korostaa / oralismia 「口話主義を」 [分] < oralismi (音声による発話と読唇を重要視する考え方) / kiellettiin 「禁止された」受過 < kieltää / rangaistuksen 「罰の」 [属] < rangaistus < rangaista / uhalla 「脅威により、脅しにより」 [接] < uhka / kielestä tuli sala-kieli 「言語は秘密言語となった (言語から秘密言語が来た)」 / keskenään 「おたがいに」 [様]+ 複₃ 所接 < keski

●フィンランド語理解のための訳例

フィンランドの|手話言語の|歴史は|起源をさかのぼる|1800年代の|中頃へ、|[ときに|スウェーデンで|勉強したような|ろう者|Carl Oscar Malm が|設立した|最初の|ろう者たちの|学校を|Porvoo へ。Malm の|使ったような|言語は|広まった|ろう者たちの|間へ、|しかし|ろう者たちの|教育において|始められた|優先する|[発話を|そして|読唇<術>の|重要性を|強調するような|口話主義を]。手話言語の|使用は|学校において|禁止された|[さえ|罰の|脅威により]。こうして|言語から|来た|ろう者たちの|おたがいに|使うような|秘密言語が。

◎意訳

フィンランドの手話言語の歴史は、スウェーデンで学んだろう者である Carl Oscar Malm が Porvoo に最初のろう学校を設立した 1800 年代中頃へとさかのぼる。Malm の使った言語はろう者たちの間へ広まったが、ろう教育においては<口頭での>発話や読唇術の重要性を強調する口話主義が優先され始めた。<そのため>学校における手話の使用は罰を与えるという脅しさえ使って禁止された。こうして<手話>言語はろう者たちの間で密かに使われる言語となっていった。

【11】手話言語の地位は 1970 年代以降に変化する

1970-luvulta eteenpäin viittomakielestä tuli opetuksen apuväline, ja sitä alettiin hyväksyä laajemmin varsinkin kuurotietoisuusliikkeen myötä. Sen mukaan kuuroilla tulee olla samat oikeudet kuin kuulevillakin. Vuonna 1991 viittomakielisen opetuksen mahdollisuus kaikille lisättiin Suomen peruskoululakiin. 1995 viittomakieli sai perustuslaillisen aseman, joka takaa kuuroille oikeuden oppia kieltään ja käyttää sitä vapaasti.

■語句・文法

eteen-päin 「前方へ、以降は」 / apu-väline 「補助的手段」 / hyväksyä 「認める、受け入れる」 < hyvä / laajemmin 「より広く」 [副] 比 < laaja / varsinkin 「とくに」 / kuuro-tietoisuus-liikkeen 「ろう者くに対する」認識<を高める>運動の」 [属] < -liike (1970 年代に活発になった運動のようです) / myötä 「~につれて、~とともに、~に沿って」 / tulee olla 「なければならない」 / kuulevillakin 「聴者にも」 [複接]+ -kin < kuuleva 能現分 < kuulla / lisättiin 「加えられた」受過 < lisätä / perus-koululakiin 「基礎教育法へ」 [入] < -laki (「基礎教育法」とは日本の小中学校に相当する perus-koulu 「基礎学校」における教育について定めた法律) / perustus-laillisen aseman 「基本法上の地位を、

憲法上の地位を」[属対]< perustus-laillinen asema / takaa「保証する」単 3 現 < taata / oikeuden「権利を」[属対]< oikeus < oikea / vapaasti「自由に」[副]< vapaa

●フィンランド語理解のための訳例

1970年代から|前方へ|手話言語から|来た|教育の|補助的手段が、|そして|それを|始められた|受け入れる|より広く|とくに|ろう者くに対する>認識<を高める>運動の|つれて。その|よれば|ろう者たちには|なければならぬ|同じ|権利が|聴者にと。1991年に|手話言語による|教育の|可能性を|すべての人へ|加えられた|フィンランドの|基礎教育法へ。1995年に|手話言語は|得た|基本法上の|地位を、|それは|保証する|ろう者たちへ|権利を|学ぶ|自らの言語を|そして|使う|それを|自由に。

◎意訳

1970年代以降に手話言語は教育における補助的手段となり、とりわけ「ろう者に対する認識を高める運動」が進むとともに、手話言語はより広く受け入れられ始めた。それによれば、聴者たちと同じ権利をろう者はもつべきである。1991年には、すべての人にとって手話言語による教育を受ける可能性というものがフィンランドの「基礎教育法」に加えられた。さらに1995年には手話言語は基本法上の地位を獲得することとなり、ろう者たちは自らの言語を習得し、それを自由に使用する権利を保障されることになった。

★補足

【11】で出てきた基礎教育法や基本法については、【16】以降でみていくことにします。

【12】手話言語話者たちの権利には国際条約や国内法が影響を与える

Viittomakielisten kielellisiin ja kulttuurisiin oikeuksiin vaikuttavat erityisesti YK:n vammaisten oikeuksia koskeva sopimus, yhdenvertaisuuslaki ja viittomakielilaki. Viittomakieli tunnustettiin perustuslaissa vuonna 1995, mutta vasta vuonna 2015 voimaan astunut viittomakielilaki huomioi molemmat kansalliset viittomakielemme.

■語句・文法

kielellisiin ja kulttuurisiin oikeuksiin「言語的、そして文化的権利へ」[複入]< kielellinen ja kulttuurinen oikeus / YK:n「国際連合の」(YKは Yhdistyneet kansakunnatの略称です) / vammaisten oikeuksia koskeva sopimus「障害者の権利にかかわる条約(障害者権利条約)」(koskeva 能現分 < koskea. なお、この条約のフィンランド語における正式名称は”Vammaisten henkilöiden oikeuksia koskeva yleissopimus”「障害者のある人物の権利にかかわる一般条約」となっているようです。) / yhden-vertaisuus-laki「平等法、無差別法」(条文は Finlex のサイトで読むことができます <<https://www.finlex.fi/fi/laki/ajantasa/2014/20141325>>。このページを開くと ”Viittomakieli” というボタンがあり、それを押すと手話言語による動画も見ることができます。)

／viittoma-kieli-laki「手話言語法」(これについては【18】以降でみていきます)／tunnustettiin「認められた、認知された」受過 < tunnustaa < tunnus < tuntea／voimaan astunut「発効したような」(voimaan[入]< voima「力」、astunut 能過分 < astua「踏み入る」)／huomioida「考慮する」／molemmat「両方の」[複主対]< molempi-／kansalliset「国内の」[複主対]< kansallinen／viittoma-kielemme「我々の手話言語を」[複主対]+ 複1所接 < -kieli

●フィンランド語理解のための訳例

手話話者たちの|言語的な|そして|文化的な|権利へ|影響する|とくに|国連の|障害者たちの|権利に|かかわるような|条約が、|平等法が|そして|手話言語法が。手話言語を|認知された|基本法において|1995年に、|しかし|やっと|2015年に|効力の中へ|踏み入ったような|手話言語法が|考慮する|両方の|国内の|我々の手話言語を。

◎意訳

手話言語話者たちの言語的・文化的権利にとくに影響を与えるものが、国連による「障害者の権利に関する条約」、〈フィンランドの〉「平等法」、そして「手話言語法」である。1995年には基本法において手話言語の存在が認知されたが、2015年に発効した「手話言語法」がはじめて我が国の両方の手話言語を考慮することになった。

★補足

次の【13】以降で、まずは手話言語にとって重要な意味をもつ条約についてみていき、その後で手話言語法など国内の法律について確認していくことにします。

【13】国連の「障害者権利条約」は手話を「言語」だとしている

YK:n vammaisyleissopimus on tärkeä myös viittomakieltä käyttävien kielellisten oikeuksien kannalta. Viittomakieli mainitaan nimenomaisesti sen viidessä eri artiklassa. Esimerkiksi yleissopimuksen 2 artiklassa viittomakieli tunnustetaan kieleksi ja rinnastetaan puhuttuihin kieliin.

■語句・文法

vammais-yleis-sopimus「障害者権利条約」(【12】で出てきた”vammaisten oikeuksia koskeva sopimus”のことです)／käyttävien「使う人々の」[複属]< käyttävä 能現分 < käyttää／kannalta「～の観点から」[奪]< kanta／mainitaan「挙げられる、言及される」受現 < mainita／nimenomaisesti「まさに、ちょうど」[副]< nimen-omainen／viidessä eri artiklassa「五つの異なる条項の中で」(viidessä[内]< viisi. eri は格変化しない語)／rinnastetaan「並べられる、同等とされる」受現 < rinnastaa < rinta／puhuttuihin kieliin「話される言語へ、音声言語へ」[複入]< puhuttu kieli (puhuttu 受過分 < puhua)

●フィンランド語理解のための訳例

国連の|障害者権利条約は|重要である|また|手話言語を|使用する人々の|言語的な|権利の|

観点から。手話言語を|言及されている|まさに|その|五つの|異なる|条項において。たとえば|条約の|第2条において|手話言語を|認知されている|言語として|そして|並べられる|話される|言語へ。

◎意訳

国連による「障害者権利条約」はまた、手話言語を使用する人々の言語的権利という観点からも重要である。手話言語は条約の実に五つの条項において言及されている。たとえば条約の第2条において手話言語は言語として認知されており、音声言語と同等なものとされている。

★補足

次の【14】では、I-4の資料にも出てきた”Euroopan neuvoston alueellisia kieliä tai vähemmistökieliä koskeva eurooppalainen peruskirja”「欧州審議会による地域言語または少数言語のための欧州憲章」に関する記述を確認します。

【14】「欧州憲章」は手話言語には適用されないのか？

Suomi on sitoutunut soveltamaan kieliperuskirjan II osan yleisiä tavoitteita ja periaatteita saamen kielten, ruotsin kielen, romanikielen sekä venäjän, tataarin, jiddishin ja karjalan kielen osalta. Saamen kielten ja ruotsin kielen osalta Suomi on lisäksi sitoutunut soveltamaan III osan artikloita. Viittomakielet eivät kuulu kieliperuskirjan ja vähemmistöpuiteyleissopimuksen piiriin, vaikka tarvetta tähän on pidetty esillä.⁸⁶

◇原注(文中で言及されている参考文献など)

86 Valtioneuvosto (2013), s. 9. Kuurojen Liitto ry 9.11.2021. Ks. myös Tupi E. Sign language rights in the framework of the council of Europe and its member states. Publication of the Ministry for Foreign Affairs of Finland 2019.

■語句・文法

on sitoutunut「(履行すると)約束している」単 3 完 < sitoutua (+ MA 不[入]) < sitoa / soveltamaan「適用する」MA 不[入] < soveltaa / kieli-perus-kirjan「言語憲章の」[属] I < -kirja (これは資料 I-4の【1】から【5】であつかった”Euroopan neuvoston alueellisia kieliä tai vähemmistökieliä koskeva eurooppalainen peruskirja”「欧州審議会による地域言語または少数言語のための欧州憲章」のことをさしています。なお、英語名は”European Charter for Regional or Minority Languages”となっています。) / II osan = toisen osan「第二部の」 / yleisiä tavoitteita ja periaatteita「一般的な目的と原則を」[複分] < yleinen tavoite ja periaatte / osalta「~に関して」[奪] < osa / lisäksi「加えて、さらに」[変] < lisää / III osan = kolmannen osan「第三部の」 / vähemmistö-puite-yleis-sopimuksen「民族的少数者保護枠組条約」(これも欧州審議会による条約で、フィンランド語における正式名称は”Kansallisten vähemmistöjen suojelua koskeva puiteyleissopimus”です。なお、英語名は”Framework Convention for the Protection of National Minorities”のようです。) / piiriin「圏内へ、枠内へ」[入] < piiri / tarvetta tähän「これに対する必

要性を」(täähän [入] < tämä) / on pidetty esillä「表明されてきている、指摘されてきている、話題にされてきている」受完 < pitää esillä

●フィンランド語理解のための訳例

フィンランドは| (履行すると) 約束している| 適用すると| 言語憲章の| 第二部の| 一般的な| 目的を| そして| 原則を| [サーミ語の、| スウェーデン語の、| ロマニ語の| さらに| ロシア語の、| タタール語の| イディッシュ語の| そして| カレリア語の| に関して]。[サーミ語の| そして| スウェーデン語の| に関して]は| フィンランドは| 加えて| 約束している| 適用すると| 第三部の| 条項を。手話言語は| 属していない| 言語憲章の| そして| 民族的少数者保護枠組条約の| 枠内へ、| [~だけれども| 必要性を| これへ]| 表明されてきている]。

◎意訳

サーミ語、スウェーデン語、ロマニ語、ロシア語、タタール語、イディッシュ語、そしてカレリア語について、フィンランドは「欧州審議会による地域言語または少数言語のための欧州憲章」の第二部における一般的な目的と原則を適用することを約束している。さらにサーミ語とスウェーデン語については、同憲章第三部の条項を適用することを約束している。〈ただし〉手話言語は、その必要性が指摘されてきているにもかかわらず、「欧州憲章」および〈やはり欧州審議会による〉「民族的少数者保護枠組条約」の適用対象には含まれていない。

★補足

「欧州審議会による地域言語または少数言語のための欧州憲章」については、解説と条文の日本語訳が次の文献にありますので、ぜひ参考にしてください。

□参考図書

渋谷謙次郎 編. 2005. 『欧州諸国の言語法—欧州統合と多言語主義』. 三元社.

なお【14】にある第二部とは、地域言語・少数言語すべてに適用されるべき一般的な原則を挙げた部分で、一方の第三部は「教育」「司法」「メディア」などさまざまな場面で適用されるべき規則を挙げた部分です。

上に挙げた参考図書には「民族的少数者保護枠組条約」に関する記述もありますが、さらに欧州各国の政策や法律に関する解説もあります。フィンランドについての章もありますので、参考にしてください。

【15】国連による「国際手話言語デー」

YK:n julistamaa kansainvälistä viittomakielen päivää vietetään vuosittain 23. syyskuuta (vuodesta 2018 alkaen). Kansallista viittomakielen päivää Suomessa vietetään puolestaan helmikuun 12. päivä.

■ 語句・文法

julistamaa「宣言したような」[分]<julistama 動分 <julistaa <julki/kansain-välistä「国際的な」[分]<-välinen/vietetään「過ごされる、祝われる」受現 <viettää/vuosittain「毎年」<vuosi/kansallista「国内の」[分]<kansallinen <kansa/puolestaan「一方で」[出]+ 単 3 所接 <puoli

● フィンランド語理解のための訳例

国連の|宣言したような|国際的な|手話言語の|日を|祝われる|毎年|23 日|9 月|(2018 年以降)。国内の|手話言語の|日を|フィンランドで|祝われる|一方で|2 月の|12 日に。

◎ 意訳

国連の宣言した「国際手話言語デー」は毎年 9 月 23 日に祝われる。一方、フィンランドにおける「全国手話言語デー」は 2 月 12 日に祝われる。

★ 補足

それでは国内法の話へ移っていきます。憲法に相当する基本法、手話言語法、学校教育にかかわる法などのついてみていくことにします。

【16】1999 年の基本法改正は手話言語にとって重要な意味をもつ

Perustuslakia uudistettiin vuonna 1999, ja sen 17. pykälässä mainitaan kansalliskielten lisäksi kolmen muun kotimaisen kieliryhmän eli saamenkielisten, romanien ja viittomakielisten oikeudet sekä muiden ryhmien oikeudet.

■ 語句・文法

uudistettiin「改正された」受過 <uudistaa/pykälässä「条(項)において」[内]<pykälä/kansallis-kielten「国語の」[複属]<-kieli/kotimaisen「国内の、国産の」[属]<kotimainen <koti

● フィンランド語理解のための訳例

基本法を|改正された|1999 年に、|そして|その|17 条において|挙げられる|国語の|加えて|三つの|他の|国内の|言語集団の|つまり|サーミ語話者たちの、|ロマン人たちの|そして|手話言語話者たちの|権利を|さらに|他の|集団の|権利を。

◎ 意訳

〈フィンランド〉基本法は 1999 年に改正され、その第 17 条において国語〈であるフィンランド語と

スウェーデン語〉に加え三つの国内言語集団の、つまりサーミ語話者、ロマ人、そして手話言語話者の権利に言及されることとなり、さらには他の集団の権利に言及されることとなった。

★補足

フィンランド基本法第 17 条については、『フィンランド語の世界を読む』第 17 課の中の 1 と 2 のテキストで取り上げていますので、参考にしてください。

【17】手話言語話者たちは言語的・文化的少数派とみなされている

Perustuslain perusteluissa todetaan, että muiden kielellisten vähemmistöjen lisäksi Suomessa on noin 5 000 viittomakieltä käyttävää kuuroa, ja viittomakieli voidaan kielellisenä järjestelmänä rinnastaa puhuttuihin kieliin.⁴⁵ Oikeusministeriön työryhmän vuodelta 1996 olevan mietinnön mukaan myös viittomakieltä käyttävät nähdään kieli- ja kulttuuriryhmänä.⁴⁶

◇原注(文中で言及されている参考文献など)

45 HE 309/1993 vp.; Hallberg et al. (2011).

46 Viittomakielen oikeudellinen asema, työryhmän mietintö. Oikeusministeriön lainvalmisteluosasto 1996.

■語句・文法

perusteluissa 「趣意説明において、根拠づけにおいて」[複内] < perustelu < perustella / todetaan 「述べられる」受現 < todeta / muiden kielellisten vähemmistöjen 「他の言語的少数派の」[複属] < muu kielellinen vähemmistö / käyttävää 「使うような」[分] < käyttävä 能現分 < käyttää / kielellisenä järjestelmänä 「言語体系として」[様] < kielellinen järjestelmä / rinnastaa 「並べる、同列に扱う」 / puhuttuihin kieliin 「(音声により) 話される言語へ」[複入] < puhuttu kieli (puhuttu 受過分 < puhua) / oikeus-ministeriön 「法務省の」[属] > -ministeriö / olevan 「～であるような」[属] < oleva 能現分 < olla / mietinnön 「報告書の」[属] < mietintö < miettiä / käyttävät 「使う人々を」[複主対] < käyttävä 能現分 < käyttää / nähdään 「みなされる」受現 < nähdä

●フィンランド語理解のための訳例

基本法の|趣意説明において|述べられる、|[と]いうことを|他の|言語的な|少数派たちの|加えて|フィンランドには|いる|約|5000 の|手話言語を|使用するような|ろう者たちが、|そして|手話言語を|できる|言語的な|体系として|並べる|話される|言語へ。法務省の|作業グループの|1996 年から|であるような|報告書の|よれば|また|手話言語を|使用する人々を|みなされる|言語・文化集団として。

◎意訳

〈1999 年に改正されたフィンランド〉基本法の趣意説明においては、他の言語的少数派に加え

インランドには手話言語を使用するろう者が約 500 名存在すること、そして言語体系としての手話言語は音声言語と同列に扱うことができるものであることが述べられている。法務省の作業部会による 1996 年の報告書によれば、手話言語を使用する人々はまた言語的・文化的集団とみなされる。

【18】手話言語法は公的機関に義務を課している

Viittomakielilaki asettaa viranomaisille velvollisuuden edistää viittomakieltä käyttävän mahdollisuuksia käyttäen omaa kieltään ja saada tietoa omalla kielellään. Viittomakielilailla pyritään myös lisäämään viranomaisten tietoisuutta viittomakielistä sekä viittomakieltä käyttävistä kieli- ja kulttuuriryhmänä. Tarkemmat säännökset esimerkiksi viittomakieltä käyttävien oikeudesta saada tulkkipalveluita ovat edelleen eri hallinnonalojen lainsäädännössä.

■ 語句・文法

asettaa 「設定する、課す」 / viran-omaisille 「公的機関へ、公権力へ」 [複向] < -omainen / velvollisuuden 「義務を」 [属対] < velvollisuus < velvollinen / edistää 「促進する」 < esi- / käyttävän 「使う人の」 [属] < käyttävä 能現分 < käyttää / mahdollisuuksia 「可能性を、機会を」 [複分] < mahdollisuus < mahdollinen / viittoma-kieli-lailla 「手話言語法により」 [接] < -laki / pyritään 「試みられる、めざされる」 受現 < pyrkiä (+ MA 不[入]) / lisäämään 「加える、増やす」 MA 不[入] < lisätä / tietoisuutta 「認識を、知識を」 [分] < tietoisuus < tietoinen < tieto < tietää / käyttävistä 「使う人々について」 [複出] < käyttävä 能現分 < käyttää / tarkemmat 「より詳細な」 [複主対] < tarkempi 比 < tarkka / säännökset 「規定は」 [複主] < säännös ⇒ säätää / tulkki-palveluita 「通訳サービスを」 [複分] < -palvelu < palvella / hallinnon-alojen 「行政分野の」 [複属] < -ala / lainsäädännössä 「法令の中に」 [内] < -säädäntö < säätää

● フィンランド語理解のための訳例

手話言語法は|設定する|公的機関へ|義務を|促進する|手話言語を|使う人の|可能性を|使うための|自分の|(自らの)言語を|そして|得る|情報を|自分の|(自らの)言語により。手話言語法により|試みられる|また|増やすよう|公的機関の|認識を|手話言語について|そして|手話言語を|使う人々について|言語・|そして文化集団として。[より詳細な|規定は|たとえば|手話言語を|使う人々の|権利について|得るための|通訳サービスを]|ある|依然として|異なる|行政分野の|法令において。

◎ 意訳

手話言語法は、手話言語を使用する人が自らの言語を使用し、また自らの言語により情報を得る機会を促進させる義務を公的機関に課している。手話言語法によりまた、手話言語について、そして言語的・文化的集団としての手話言語使用者たちについて公的機関の認識を高めることもめざしている。〈一方、〉たとえば手話言語使用者が通訳サービスを受ける権利などについてのより詳細な規定は、依然として各行政分野の法令の中に見出される。

【19】手話言語法は二つの理由から重要だ

Muutamissa maissa viittomakieliä on tunnustettu myös lainsäädännön tasolla. Näin on esimerkiksi Suomessa, jossa viittomakielisiä ja heidän kielellisiä oikeuksiaan on käsitelty muun muassa perustuslaissa (731/1999) ja viittomakielilaisissa (359/2015). Näistä viittomakielilaki on tärkeä kahdesta syystä.

■ 語句・文法

muutamissa maissa「いくつかの国々において」[複内] < muutama maa/on tunnustettu「認知されている、認められている」受完 < tunnustaa/näin「このように、こうして」[複具] < tämä/kielellisiä oikeuksiaan「(自らの) 言語的権利を」(oikeuksiaan[複分]+ 複₃所接 < oikeus)/on käsitelty「扱われている、取り上げられている」受完 < käsitellä/muun muassa「なかでも、とりわけ」/näistä「これらのうち」[出] < nämä/kahdesta syystä「二つの理由から」[出] < kaksi, syy

● フィンランド語理解のための訳例

いくつかの|国々で|手話言語を|認知されている|また|法令の|レベルにおいて。このように|ある|たとえば|フィンランドにおいて、|そこで|手話言語話者たちを|そして|彼らの|言語的な|(自らの) 権利を|取り上げられている|なかでも|基本法(1999 年第 731 号法令)において|そして|手話言語法(2015 年第 359 号法令)において。これらのうち|手話言語法は|重要である|二つの|理由から。

◎ 意訳

いくつかの国においては手話言語は法律レベルにおいても認知されている。たとえばフィンランドがそうであり、手話言語話者たちや彼らの言語的権利は、なかでも基本法(1999 年第 731 号法令)や手話言語法(2015 年第 359 号法令)において取り上げられている。これらのうち手話言語法は二つの理由から重要なものである。

【20】手話言語法はフィンランドの手話言語を二つに分けている

Ensimmäinen on se, että laki jakaa viittomakielet Suomen kontekstissa kahteen ryhmään, suomalaiseen viittomakieleen ja suomenruotsalaiseen viittomakieleen. Näistä jälkimmäinen on käyttäjämäärältään erityisen pieni ja uhanalainen kieli, jonka elvytys vaatii ripeitä toimenpiteitä.

■ 語句・文法

se, että ~「~ということ」/kontekstissa「文脈において」[内] < konteksti/kahteen ryhmään「二つのグループへ」[入] < kaksi, ryhmä/jälkimmäinen「後者は」⇒ jälki/käyttäjämäärältään「使用者数の点からは」[奪]+ 単₃所接 < -määrä/erityisen「とくに」[属]=[副] < erityinen/elvytys「再生は、再活性化は」< elvyttää < elvyä < elää/ripeitä toimenpiteitä「すばやい行動を、早急な対策を」[複分] < ripeä toimenpide

● フィンランド語理解のための訳例

一つ目は|である、|[ということ|〈手話言語〉法は|分ける|手話言語を|フィンランドの|文脈において|二つの|グループへ、|フィンランドの|手話言語へ|そして|スウェーデン語系フィンランドの|手話言語へ。これらのうち|後者は|である|使用者数の点から|[とくに|小さな|そして|脅威にさらされた|言語]、|その|再活性化は|要求する|すばやい|行動を。

◎意識

〈手話言語法が重要である理由の〉一つ目は、同法がフィンランドにおける手話言語を二つに、つまりフィンランド手話言語とスウェーデン語系フィンランド手話言語へと分けている点である。これらのうち後者は使用者数の点からすると、きわめて小さく消滅の危機に瀕している言語であり、その再活性化のためには早急な対策が求められる。

【21】公的機関は手話言語話者の言語的権利を促進する義務を負う

Toinen syy viittomakielilain tärkeyteen on sen viranomaisille asettama velvoite edistää viittomakieltä käyttävien ihmisten mahdollisuuksia käyttää omaa kieltään ja saada tietoa omalla kielellään. Laki velvoittaa ainoastaan viranomaisia, mutta moraalisenä ohjeena se voisi toimia yhteiskunnassa laajemminkin.

■語句・文法

tärkeyteen「重要性へ、重要性に対する」[入] < tärkeys < tärkeä / asettama「設定するような、課すような」動分 < asettaa / velvoite「義務」 < volvoittaa / velvoittaa「義務づける」 / ainoastaan「ただ~だけ」 / moraalisenä ohjeena「道徳的指針として、倫理的規範として」[様] < moraalinen ohje / voisi「ありうるだろう」[条] 単 3 現 < voida / toimia「機能する」 / laajemmin-kin「より広範にも」[副] 比 < laaja + -kin

●フィンランド語理解のための訳例

二つ目の|理由は|手話言語法の|重要性に対する|である|その|公的機関へ|設定するような|義務|促進するための|手話言語を|使用するような|人々の|可能性を|使うための|自分の|(自らの)言語を|そして|得るための|情報を|自分の|(自らの)言語により。法は|義務づける|ただ|公的機関を、|しかし|道徳的な|指針として|それは|ありうるだろう|機能する|社会において|より広範にも。

◎意識

〈手話言語法が重要である〉二つ目の理由というのは、それが手話言語を使用する人々が自らの言語を使用し自らの言語で情報を受け取る可能性を促進させる義務を公的機関に課しているという点である。同法は公的機関にのみ義務を課してはいるが、しかし社会において倫理的指針としてより広い意味で機能する可能性がある。

★補足

手話言語法そのものをみると、わずか五つの条項からなる短い法律です。ただし、手話言語

の使用を促進する義務を公的機関が負うことを明確にしている点で大きな意味をもつ法律です。また、同法の第 4 条では、手話言語を使用する人の言語的権利を定めた法律として、教育や行政、あるいは社会サービスに関するものなど、10 以上の法律が列挙されています。興味がある方は次の URL でみてみてください。

Viittomakielilaki <<https://www.finlex.fi/fi/laki/alkup/2015/20150359>>

それでは教育に関する法律について確認していきます。

【22】手話言語は基礎学校における教授言語となることができる

Perusopetuslain (628/1998) 10 §:n 1 momentin mukaan koulun opetuskieli ja muualla kuin koulussa järjestettävässä opetuksessa käytettävä kieli on joko suomi tai ruotsi. Opetuskielenä voi olla myös saame, romani tai viittomakieli. Lain 10 §:n 2 momentin mukaan kuulovammaisille tulee tarvittaessa antaa opetusta myös viittomakielellä.

■ 語句・文法

perus-opetus-lain「基礎教育法の」[属]<-laki (perus-koulu「基礎学校」における教育について定めた法律) / 10 §:n 1 momentin mukaan「第 10 条第 1 項において」(“§:n”は“§”の属格ですが、“§”という記号は“pykälä”「条」と読むと思います。一方、momentin は momentti「項」の属格です。また、おそらく「10」と「1」は序数だと思しますので、発音する際には“kymmenennen pykälän ensimmäisen momentin”と読むのではないかと……。) opetus-kieli「教授言語、教育言語」/ muualla kuin ~「~以外の場所で」(muualla < muu ⇒ muualta, muualle) / järjestettävässä「催されるような、行われるような」[内]<järjestettävä 受現分 < järjestää / käytettävä「使われるような」受現分 < käyttää / joko ~ tai ...「~か、あるいは…のいずれか」/ opetus-kielenä「教授言語として、教育言語として」[様]<-kieli / kuulo-vammaisille「聴覚障害者たちへ」[複向]<-vammaisen / tulee「しなければならない」/ tarvittaessa「必要な場合には」受 e 不 [内]< tarvita [時構]

● フィンランド語理解のための訳例

基礎教育法(1998 年第 628 号法令)の|第 10 条第 1 項の|よれば|学校の|教授言語は|そして|[他の場所において|学校以外で|催されるような|教育において|使われるような|言語は]|である|いずれか|フィンランド語か|あるいは|スウェーデン語。教授言語として|できる|ある|また|サーミ語、|ロマニ語|あるいは|手話言語。法の|第 10 条第 2 項の|よれば|聴覚障害者たちへ|しなければならぬ|必要な場合には|与える|教育を|また|手話言語により。

◎ 意訳

基礎教育法(1998 年第 628 号法令)第 10 条第 1 項によれば、学校における教授言語および学校以外の場所で実施される教育において使用される言語はフィンランド語かスウェーデン語のいずれかである。またサーミ語、ロマニ語、そして手話言語も教授言語となりうる。同法第 10 条第 2 項に

よれば、聴覚障害者に対して必要な場合には手話言語により教育を行わなければならない。

【23】手話言語を教授言語とする義務は聴覚障害の度合いにより決まる

Pykälän 2 momenttiin otetaan lisäksi säännös velvollisuudesta käyttää viittomakieltä opetuskielenä. – – Velvollisuus määräytyisi oppilaiden kuulovammaisuuden asteen mukaan. Ainakin viittomakieltä ensimmäisenä kielenä oppineille kuuroille opetus tulee antaa viittomakielellä.⁵⁰

◇原注(文中で言及されている参考文献など)

50 HE 86/1997 vp

■語句・文法

otetaan「とられる」受現 < ottaa／määräytyisi「決まるだろう、決定されるだろう」[条]単 3 現 < määräytyä < määrätä／kuulo-vammaisuuden「聴覚障害の」[属]< -vammaisuus／asteen「度合いの」[属]< aste／oppineille「習得したような」[複向]< oppinut 能過分 < oppia／tulee「しなければならない」単 3 現 < tulla

●フィンランド語理解のための訳例

〈10〉条の|第 2 項へ|とられている|加えて|規定を|[義務について|使う|手話言語を|教授言語として]。--義務は|決まるだろう|生徒たちの|聴覚障害の|度合いの|よって。少なくとも|手話言語を|第一|言語として|習得したような|ろう者たちへ|教育を|しなければならない|与える|手話言語により。

◎意訳

〈基礎教育法第 10〉条第 2 項へは、手話言語を教授言語として使用する義務についての規定もまた盛り込まれている。--その義務は生徒たちの聴覚障害の度合いによって決定されることになるだろう。少なくとも手話言語を第一言語として習得したろう者たちに対しては、手話言語による教育を実施しなければならない。

【24】手話言語は母語としても教えることができる

Äidinkielen opetuksesta säädetään perusopetuslain 12 §:ssä, jonka 1 momentin mukaan äidinkielenä opetetaan oppilaan opetuskielen mukaisesti suomen, ruotsin tai saamen kieltä. Säännöksen 2 momentin mukaan äidinkielenä voidaan huoltajan valinnan mukaan opettaa myös romanikieltä, viittomakieltä tai muuta oppilaan äidinkieltä.

■語句・文法

säädetään「定められる、制定される」受現 < säätää／opetetaan「教えられる」受現 < opettaa／mukaisesti「～にしたがって」[副]< mukainen／huoltajan「保護者の」[属]< huoltaja < huoltaa <

huoli/valinnan「選択の」[属]< valinta < valita

●フィンランド語理解のための訳例

母語の|教育について|定められる|基礎教育法の|第 12 条において、|その|第 1 項の|よれば|母語として|教えられる|[生徒の|教授言語の|したがって]|フィンランド語を、|スウェーデン語を|あるいは|サーミ語を。規定の|第 2 項の|よれば|母語として|できる|[保護者の|選択の|よって]|教える|また|ロマニ語を、|手話言語を|あるいは|他の|生徒の|母語を。

◎意訳

母語の教育については基礎教育法第 12 条において定められているが、その第 1 項によれば、生徒の教授言語にしたがってフィンランド語、スウェーデン語、あるいはサーミ語を母語として教えることとなる。同規定の第 2 項によれば、保護者の選択により母語としてロマニ語、手話言語、あるいは生徒の他の母語を教えることもできる。

【25】高校でも手話言語は教授言語となりうる

Lukiolain (714/2018) 14 §:n mukaan oppilaitoksen opetuskieli on suomi tai ruotsi. Opetuskielenä voi olla lisäksi saame, romani tai viittomakieli taikka muu 3 §:ssä tarkoitettussa luvassa määrätty kieli.

■語句・文法

lukio-lain「高校法の」[属]< -laki/ oppi-laitoksen「教育機関の」[属]< -laitos/ taikka = tai/ tarkoitettussa luvassa「意図されるような許可において」[内]< tarkoitettu lupa (tarkoitettu 受過分 < tarkoittaa) / määrätty「決定されたような、指定されたような」受過分 < määrät

●フィンランド語理解のための訳例

高校法(2018 年第 714 号法令)の|第 14 条の|よれば|教育機関の|教授言語は|フィンランド語|あるいは|スウェーデン語である。教授言語として|できる|ある|加えて|サーミ語、|ロマニ語|あるいは|手話言語|あるいは|その他の|第 3 条において|意図されているような|許可の中で|指定されたような|言語。

◎意訳

高校法(2018 年第 714 号法令)第 14 条によれば、教育機関の教授言語はフィンランド語、あるいはスウェーデン語である。加えてサーミ語、ロマニ語、あるいは手話言語、さらには第 3 条で意図されるような許可の中で指定された言語も教授言語となることができ。

★補足

【25】で出てきた「第 3 条」では、この法律で意図する教育を行うには教育・文化省の許可が必要だとを規定しています。つまり、「第 3 条で意図されるような許可の中で指定された言語」とは、教育・文化省により教育を行う許可を得る際に、教授言語として許可・指定された言語のことです。

【26】そして手話言語は高校でも母語として教えることができる

Lukiolain 15 §:n mukaan äidinkielenä opetetaan oppilaitoksen opetuskielen mukaisesti suomea tai ruotsia tai opiskelijan äidinkielen mukaisesti saamen kieltä. Äidinkielenä voidaan opettaa myös romanikieltä, viittomakieltä tai muuta opiskelijan äidinkieltä. Äidinkielen opetuksesta säädetään tarkemmin valtioneuvoston asetuksella.⁵³

◇原注(文中で言及されている参考文献など)

53 Lukiolaki (714/2018).

■ 語句・文法

tarkemmin「より詳細に」[副] 比 < tarkka / valtio-neuvoston「政府の、国家評議会の」[属] < -neuvosto / asetuksella「政令により、大統領令により、省令により」[接] < asetus < asettaa

● フィンランド語理解のための訳例

高校法の|第 15 条の|よれば|母語として|教えられる|[教育機関の|教授言語の|したがって]|フィンランド語を|あるいは|スウェーデン語を|あるいは|[学生の|母語の|したがって]|サーミ語を。母語として|えきる|教える|また|ロマニ語を、|手話言語を|あるいは|他の|学生の|母語を。母語の|教育について|定められる|より詳細に|政府の|政令により。

◎ 意訳

高校法第 15 条によれば、教育機関の教授言語にしたがって母語としてフィンランド語あるいはスウェーデン語を、さらには学生の母語にしたがってサーミ語を教えることができる。母語としてはまたロマニ語、手話言語、あるいは学生の他の母語を教えることもできる。母語の教育については政令においてより詳細に定める。

★ 補足

それでは次には「母語登録」と「緊急通報」の話へ進みます。日本の住民登録に当たる手続きをする際に、フィンランドでは、「母語」を登録します。

【27】スウェーデン語系フィンランド手話言語も母語として登録できる

Suomi.fi-verkkopalvelussa voi jatkossa ilmoittaa äidinkielekseen suomenruotsalaisen viittomakielen. Tieto äidinkielestä tallennetaan väestötietojärjestelmään. Monet julkishallinnon organisaatiot ja yritykset hyödyntävät väestötietojärjestelmän tietoja.

■ 語句・文法

Suomi.fi-verkko-palvelussa「Suomi.fi ウェブサービスにおいて」[内] < -palvelu (【29】に出てくる Digi- ja väestötietovirasto「デジタル・人口情報局」の運営するサイトで、国民・住民に対してさまざ

まなサービスを提供するページです。) /jatkossa「今後は」[内]<jatko < jatkaa/ilmoittaa「知らせる、登録する」/äidin-kielekseen「(自らの)母語として」[変]+ 単 3 所接 <-kieli/tallennetaan「保存される」受現 <tallentaa/väestö-tieto-järjestelmään「人口情報システムへ」[入]<-järjestelmä(国民やフィンランドに居住する外国人に関する情報を登録するシステム) /julkis-hallinnon「行政の」[属]<-hallinto < hallita (julkis- < julkinen「公の」) /organisaatiot「機関は」[複主]< organisaatio/yrietykset「企業は」[複主]< yrittäjä < yrittää/hyödyntää「利用する、活用する」< hyöty

●フィンランド語理解のための訳例

Suomi.fi ウェブサービスにおいて|できる|今後は|知らせる|自らの母語として|スウェーデン語系フィンランドの|手話言語を。情報を|母語について|保存される|人口情報システムへ。多くの|行政の|機関は|そして|企業は|活用する|人口情報システムの|情報を。

◎意訳

Suomi.fi ウェブサービスにおいて今後は、自らの母語としてスウェーデン語系フィンランド手話言語を登録できることとなった。母語に関する情報は人口情報システムに保存される。〈そして〉多くの行政機関や企業が人口情報システムの情報を活用する。

【28】手話言語を母語として登録している人々は 500 名以上

Viittomakielen voi ilmoittaa äidinkielekseen väestötietojärjestelmään. Vuoden 2014 loppuun mennessä suomalaisen tai suomenruotsalaisen viittomakielen on ilmoittanut äidinkielekseen yli 500 henkilöä.

■語句・文法

mennessä「～までに(～へ行くときに)」e 不 [内]<mennä [時構]

●フィンランド語理解のための訳例

手話言語を|できる|知らせる|自らの母語として|人口情報システムへ。2014 年の終わりへ|までに|フィンランドの|あるいは|スウェーデン語系フィンランドの|手話言語を|知らせている|自らの母語として|500 以上の|人物が。

◎意訳

人口情報システムへ自らの母語として手話言語を登録することができる。2014 年終わりまでの間に 500 名以上が、フィンランド手話言語、あるいはスウェーデン語系フィンランド手話言語を自らの母語として登録している。

【29】ロシアの手話言語を母語として登録している人々もいる

Esimerkiksi Santalan (2019) mukaan tammikuuhun 2019 mennessä 597 henkilöä oli ilmoittanut Väestörekisterikeskukseen (nyk. Digi- ja väestötietovirasto) äidinkielekseen suomalaisen viittomakielen ja 10 henkilöä suomenruotsalaisen viittomakielen. Lisäksi 21 henkilöä oli ilmoittanut äidinkielekseen venäläisen viittomakielen.

◇原注(文中で言及されている参考文献など)

Santala, Oona-Jemina 2019. Kaksikielinen pedagogiikka ja kielelliset oikeudet viittovan oppilaan opetuksessa. Pro gradu -tutkielma. Oulun yliopisto, Eriyispedagogiikan tutkinto-ohjelma. <http://jultika.oulu.fi/files/nbnfioulu-201905141770.pdf> (6.4.2020).

■ 語句・文法

Väestö-rekisteri-keskukseen「人口登録センターへ」[入]<-keskus(現在は Digi- ja väestötietovirasto「デジタル・人口情報局」となっていますが、国民・住民に関する情報を管理する機関のようです。)/nyk. = nykyinen「現在の」

● フィンランド語理解のための訳例

たとえば|Santala (2019) の|よれば|1 月へ|2019 年の|までに|597 の|人物が|知らせていた|「人工登録センター」へ(現在の「デジタル・人口情報局」)|自らの母語として|フィンランドの|手話言語を|そして|10 の|人物が|スウェーデン語系フィンランドの|手話言語を。加えて|21 に|人物が|知らせていた|自らの母語として|ロシアの|手話言語を。

◎ 意訳

たとえば Santala (2019)によれば、2019 年 1 月までに 597 名がフィンランド手話言語を、そして 10 名がスウェーデン語系フィンランド手話言語を自らの母語として「人口登録センター」(現在の「デジタル・人口情報局」)へ登録していた。加えて 21 名がロシア手話言語を母語として登録していた。

【30】手話言語で緊急通報を!

Hätäilmoitus viittomakielellä

Hätätilanteessa voit nyt tehdä hätäilmoituksen suomalaisella viittomakielellä.

Tee hätäilmoitus viittomakielellä

■ 語句・文法

hätä-ilmoitus「緊急通報」/hätä-tilanteessa「緊急事態において」[内]<-tilanne

● フィンランド語理解のための訳例

緊急通報を|手話言語で

緊急事態において|あなたはできる|今|する|緊急通報を|フィンランドの|手話言語により。

しなさい|緊急通報を|手話言語により。

◎意識

手話言語で緊急通報を

緊急事態においては現在、フィンランド手話言語で緊急通報を行うことができるようになりました。

手話言語で緊急通報をしてください。

【31】「112 Suomi」アプリを使った実験

Hätäilmoitus viittomakielellä -palvelu on osa kokeilua, jossa selvitetään, miten 112 Suomi -sovellus ja Kelan etäpalvelu soveltuvat hätätilanteisiin ja viranomaistoimintaan. Kokeilun tavoitteena on edistää yhdenvertaisuutta viranomaispalveluissa.

Palvelu on avoinna maanantaista perjantaihin klo 8–16. Kokeilu päättyy vuoden 2023 lopussa.

■語句・文法

kokeilua「実験のうち」[分]<kokeilu<kokeilla(この分格は「~のうち」という意味で直前の osa「部分」と結びつきます) /selvitetään「明らかにされる」受現<selvittää<selvä /112 Suomi -sovellus「112 フィンランド・アプリケーション」(Hätä-keskus-laitos「緊急センター局」の提供するアプリで、緊急通報などに利用できるようです。) /Kelan「Kela(社会保障局)の」(KelaはKansan eläke-laitos「国民年金局」の頭文字をとったものですが、年金以外にも育児休業給付や学生補助金、あるいは医療費の負担など、フィンランド人やフィンランドに居住する人々の社会保障全般にかかわる業務を担当しています。そのため「社会保障局」と訳しておくことにします。) /etä-palvelu「遠隔サービス」 /soveltua「適用される、利用される」<soveltaa<sopia /hätä-tilanteisiin「緊急事態へ」[複入]<-tilanne /viran-omais-toimintaan「公的機関の活動へ」[入]<-toiminta /tavoitteena「目的として」[様]<tavoite<tavoittaa /yhden-vertaisuutta「同等性を、平等を」[分]<-vertaisuus<-vertainen /avoinna「開かれて」[様]<avoin ⇒ avata /päättää「終わる」

●フィンランド語理解のための訳例

緊急通報を|手話言語で|サービスは|一部である|実験のうち、|そこでは|明らかにされる、|どのように|「112 Suomi」アプリケーションが|そして|Kelaの|遠隔サービスが|適用される|緊急事態へ|そして|公的機関の活動へ。実験の|目的として|ある|促進する|平等を|公的機関サービスにおける。

サービスは|開かれている|月曜日から|金曜日まで|8時から16時まで。実験は|終わる|2023年の|終わりに。

◎意識

「手話言語で緊急通報を」サービスは「112 フィンランド」アプリや Kela(社会保障局)の遠隔サービスが緊急事態や公的機関の活動にいかにか活用できるのかを明らかにしようとする実験の一部で

ある。実験の目的となっているのは公的機関のサービスにおける平等を促進することである。

同サービスは月曜日から金曜日までの 8 時から 16 時まで利用できる。この実験は 2023 年終わりに終了する。

【32】実験はよい経験をもたらしたといえる

Kokeilu alkoi kesällä 2021 ja sen tavoitteena oli selvittää, miten suomalainen viittomakieli ja 112- sovellus soveltuvat hätätilanteisiin ja viranomais toimintaan.

- Yhteydenottoja on ollut vuosittain 600-700, joista Hätäkeskuslaitokseen on yhdistetty 10-20 vuodessa. Kokeilu antoi hyviä kokemuksia niin käytettävästä tekniikasta, toimeenpanosta kuin viranomaisyhteistyöstäkin, projektipäällikkö Tuomas Sola Kelasta kertoo.

■ 語句・文法

yhteyden-ottoja「連絡は、接触は」[複分]< -otto < ottaa (yhteyden [属]< yhteys < yksi) / vuosittain「年間に、一年ごとに」< vuosi / joista「それらのうち」[複出]< joka / Hätä-keskuslaitokseen「緊急センター局へ」[入]< -laitos / on yhdistetty「つながれた、接続された」受完 < yhdistää < yksi / hyviä kokemuksia「よい経験を」[複分]< hyvä kokemus / niin ~ kuin ... (-kin)「～も...も、...と同じく～も」 / käytettävästä tekniikasta「使用される技術について」[出]< käytettävä tekniikka (käytettävä 受現分 < käyttää) / toimeen-panosta「実行について、実施について」[出]< -pano < panna / viran-omais-yhteis-työstä-kin「公的機関の協力についても」[出]+ -kin < +työ / projekti-päällikkö「プロジェクトマネージャー、企画の責任者」

● フィンランド語理解のための訳例

実験は|始まった|夏に|2021 年|そして|その|目的として|あった|明らかにすることが、|どのよう
に|フィンランドの|手話言語は|そして|「112」アプリケーションは|適用されるのか|緊急事態へ|そして
て|公的機関の活動へ。

—連絡は|あった|年間に|600 から 700、|それらのうち|緊急センター局へ|つながれた|10 から 20
を|一年に。実験は|与えた|よい|経験を|[同じく|使用される|技術について|実施について|公的
機関の協力についても]、|企画の責任者|Tuomas Sola は|Kela から|語る。

◎ 意訳

〈手話言語により緊急通報の〉実験は 2021 年夏に開始されたが、その目的となっていたのはフィンランド手話言語と「112 アプリ」が緊急事態や公的機関の活動にいかにか活用されるのかを明らかにすることだった。

—通報は年間 600 から 700 件あったが、そのうち一年に 10 から 20 件が緊急センター局へつながれた。実験は使用される技術についても、実際の活用についても、そして公的機関の間での協力についてもよい経験となるものだった、と企画の責任者である Kela の Tuomas Salo は語る。

【33】まずはビデオ通話で Kela に連絡をとり、そこから通訳が通常の緊急通報を

Viittomakielestä tulkatut hätäpuhelut toimivat siten, että viittomakielinen henkilö ottaa yhteyttä 112 Suomi -sovelluksen kautta videoyhteydellä Kelan Vammaisten tulkkauspalvelukeskukseen. Sen jälkeen tulkkauspalvelukeskuksen tulkki soittaa hätäkeskukseen normaalin puhelun.

■ 語句・文法

tulkatut「通訳されたような」[複主]<tulkattu 受過分 <tulkata/hätä-puhelut「電話による緊急通報」[複主]< puhelu < puhella < puhua/ siten, että ~「~というように」/ottaa yhteyttä「連絡をとる、接触する」(yhteyttä [分]<yhteys) /video-yhteydellä「ビデオ通話により」[接]<-yhteys/Vammaisten tulkkaus-palvelu-keskukseen「障害者通訳サービスセンターへ」(tulkkaus <tulkata) /tulkki「通訳」⇒ tulkata

● フィンランド語理解のための訳例

手話言語から|通訳されたような|緊急通報は|機能する|[というように|手話言語話者の|人物は|連絡をとる|112 Suomi アプリケーションの|通して|ビデオ通話により|Kela の|障害者たちの|通訳サービスセンターへ。その|後で|通訳サービスセンターの|通訳は|電話をする|緊急センターへ|通常の|電話を。

◎ 意訳

手話言語から通訳される緊急通報とは、手話言語話者が 112 Suomi アプリを通してビデオ通話により Kela の障害者通訳サービスセンターへ連絡をとるという形で機能するものである。その後で、通訳サービスセンターの通訳が緊急センターへ通常の電話をかけることになる。

【34】実験は 2023 年で終了した

Viittomakieliset ovat voineet runsaan kahden vuoden ajan ottaa yhteyden hätäkeskukseen 112 Suomi -sovelluksen kautta videoyhteydellä. Kyseessä on Hätäkeskuslaitoksen ja Kelan viranomaisyhteistyössä toteutettu kokeilu, joka on ollut tarkoitettu todellisiin hätätilanteisiin. Kokeilu päättyy vuoden 2023 lopussa, koska sen rahoitusta ei jatketa.

■ 語句・文法

runsaan kahden vuoden ajan「二年余りの間」(runsaan [属]<runsas) /kyseessä「問題となるのは」[内]<kyse <kysyä/toteutettu「実現されたような」受過分 <toteuttaa/on ollut tarkoitettu「意図されたものである」(on ollut と olla の現在完了になっていますので、おそらく tarkoitettu は「意図されたような」という形容詞として使われています。tarkoitettu は本来は tarkoittaa の受動過去分詞ですが、受動の現在完了であれば on tarkoitettu となるはずですが、しかし、on ollut tarkoitettu となっていますので、tarkoitettu はあくまでも形容詞として使われているのだと思います。) /todellisiin hätä-tilanteisiin「実際の緊急事態へ」[複入]< todellinen hätä-tilanne/

rahoitusta「資金援助を、資金提供を」[分]< rahoitus < rahoittaa < raha/ei jatketa「続けられない、継続されない」受現否 < jatkaa

●フィンランド語理解のための訳例

手話言語話者たちは|できた|二年余りの間|連絡をとる|緊急センターへ|112 Suomi アプリケーションの|通して|ビデオ通話により。問題となるのは|である|緊急センター局の|そして|Kela の|公的機関協力において|実現された|実験、|それは|意図されている|実際の|緊急事態へ。実験は|終わる|2023 年の|終わりに、|なぜなら|その|資金提供を|続けられない。

◎意訳

手話言語話者たちは二年余りの間、112 Suomi アプリを通してのビデオ通話により緊急センターへ連絡をとることができた。問題となるのは、緊急センター局と Kela との間での公的機関協力により実現した実験であり、それは実際の緊急事態に〈行われるよう〉意図されたものである。資金提供が継続されないため、この実験は 2023 年終わりをもって終了する。

【35】現在は「実時間テキスト入力」による通報という方法が導入されている

Hätäkeskuslaitos ottaa käyttöön uuden hätäilmoitustavan, reaaliaikaisen tekstinsyötön (RTT) vuonna 2025. Tällä hetkellä käytössä on palvelu, jossa ihmiset voivat tehdä hätäilmoituksen tekstiviestillä. Se vaatii kuitenkin rekisteröitymistä palveluun, toisin kuin reaaliaikainen tekstinsyöttö, jota voi käyttää, kun soittaa hätänumeroon tai käyttää 112 Suomi -sovellusta.

■語句・文法

ottaa käyttöön「採用する、利用し始める」(käyttöön[s入]+ 単 3 所接 < käyttö) / hätäilmoitus-tavan「緊急通報の方法を、緊急通報手段を」[属対]< -tapa / reaali-aikaisen「実時間の、即時の、リアルタイムの」[属対]< -aikainen / tekstin-syötön「テキスト入力を」[属対]< -syöttö < syöttää < syödä / RTT は Real Time Text の略語のようです / tällä hetkellä「現時点において」[接]< tämä hetki / käytössä「使用されて」[内]< käyttö / teksti-viestillä「テキストメッセージにより」[接]< -viesti (teksti-viesti「テキストメッセージ」は SMS や、あるいは日本語の「メール」に相当するのではないかと思います。) / rekisteröitymistä「登録することを」[分]< rekisteröityminen 動名 < rekisteröidä / toisin kuin ~「~とは異なり」(toisin [複具]< toinen) /

●フィンランド語理解のための訳例

緊急センター局は|採用する|新しい|緊急通報の方法を、|実時間の|テキスト入力 (RTT) を|2025 年に。この|瞬間には|利用されている|サービスが|そこでは|人々は|できる|行う|緊急通報を|テキストメッセージにより。それは|要求する|しかしながら|登録することを|サービスへ、|[とは異なり|実時間の|テキスト入力]、|それを|できる|使う|[ときに|電話する|緊急番号へ|あるいは|使う|112 Suomi アプリケーションを。

◎意訳

緊急連絡センター局は 2025 年に新たな通報手段である実時間におけるテキスト入力 (RTT) を導入する。現時点で利用されているサービスでは、テキストメッセージによる緊急通報ができる。しかし、それはサービスへの登録が求められるという点において、緊急番号へ電話をしたり 112 Suomi アプリを使ったりする際に利用できる実時間におけるテキスト入力とは異なるものである。

★補足

手話言語話者にとって重要になるのが通訳・翻訳の問題です。それでは、通訳・翻訳に関する記述を確認します。

【36】手話言語話者の通訳・翻訳に対する権利は法により保障される

Suomen perustuslain 17 §:n 2 momentin mukaan viittomakieltä käyttävien sekä vammaisuuden vuoksi tulkitsemis- ja käännösapua tarvitsevien oikeudet tulee turvata lailla. Viittomakieliset ovat kieli- ja kulttuurivähemmistö Suomessa.

■語句・文法

17 §:n 2 momentin mukaan「第 17 条第 2 項によれば」(おそらく「17」と「2」は序数だと思しますので、発音する際には”seitsemännen-toista pykälän toisen momentin mukaan”と読むのではないかと思います。) / käyttävien「使う人々の」[複属] < käyttävä 能現分 < käyttää / vammaisuuden「障害の」[属] < vammaisuus < vammainen < vamma / tulkitsemis- ja käännös-apua「通訳および翻訳の助けを」(tulkitsemis- < tulkitseminen 動名 < tulkita, käännös < kääntää) / tarvitsevien「必要とする人々の」[複属] < tarvitseva 能現分 < tarvita / tulee turvata「保障しなければならない」

●フィンランド語理解のための訳例

フィンランドの|基本法の|第 17 条第 2 項の|よれば|手話言語を|使う人々の|そして|障害の|ために|通訳・|そして|通訳補助を|必要とする人々の|権利を|しなければならない|保障する|法により。手話言語話者たちは|である|言語・|そして文化少数派|フィンランドにおいて。

◎意訳

フィンランド基本法第 17 条第 2 項によれば、手話言語を使用する人々および障害のために通訳・翻訳支援を必要とする人々の権利は法により保障されなければならない。手話言語話者はフィンランドにおいて言語的・文化的少数派である。

【37】通訳・翻訳の権利はさまざまな法律の中で規定されている

Säännöksiä viittomakielen tulkitsemis- ja käännösavusta on eri hallinnonalojen lainsäädännössä. Myös muilta osin viittomakieltä käyttävien kielellisistä oikeuksista säädetään eri hallinnonalojen lainsäädännössä, kuten opetusta sekä sosiaali- ja terveydenhuoltoa koskevassa lainsäädännössä. Viittomakielilain toimivuutta arvioidaan oikeusministeriössä.

■ 語句・文法

säännöksiä「規定は」[複分]< säännös/tulkitsemis- ja käännös-avusta「通訳および翻訳支援について」[出]< -apu/hallinnon-alojen「行政分野の」[複属]< -ala/muilta osin「他の部分について、他の点に関して」/käyttävien「使う人々の」[複属]< käyttävä 能現分 < käyttää/kielellisistä oikeuksista「言語的権利について」[複出]< kielellinen oikeus/säädetään「定められる」受現 < säättää/sosiaali- ja terveyden-huoltoa「社会福祉・保健医療事業に」[分]< -huolto < huoltaa < huoli/koskevassa「かかわるような」[内]< koskeva 能現分 < koskea/toimivuutta「機能性を、機能していることを」[分]< toimivuus < toimiva 能現分 < toimia/arvioidaan「評価される」受現 < asvioida < arvio

● フィンランド語理解のための訳例

規定は|手話言語の|通訳・|そして翻訳支援について|ある|異なる|行政分野の|法令の中に。また|他の|部分について|手話言語を|使う人々の|言語的な|権利について|定められる|異なる|行政分野の|法令において、|[ような|教育に|さらに|社会<福祉>・|そして|保健<医療>事業に|かかわるような|法令において]。手話言語法の|機能性を|評価される|法務省において。

◎ 意訳

手話言語の通訳・翻訳支援についての規定は、さまざまな行政分野の法令に存在している。他の側面についても、手話言語を使用する人々の言語的権利については、たとえば教育に関する法令、あるいは社会福祉・保健医療事業に関する法令など、さまざまな行政分野の法令において定められている。手話言語法が機能しているかどうかについては、法務省内にて評価される。

★ 補足

「障害のある人物の通訳サービスに関する法律 (Laki vammaisten henkilöiden tulkkauspalvelusta)」(2010 年第 133 号法律)によれば、聴覚と視覚の両方に障害のある人物は年間に少なくとも 360 時間の、そして聴覚あるいは発話に障害のある人物は 180 時間の通訳サービスを受ける権利があるとされています。また、教育については必要な範囲で通訳サービスを受けられるとされています。

それでは、手話言語話者に関する最近の動きをみていきましょう。

【38】2020年には最初の「手話言語指標・市民調査」が実施された

Vuonna 2020 toteutettiin oikeusministeriön toimesta ensimmäinen Viittomakielibarometri 2020 -kansalaiskysely¹⁶, jolla selvitettiin suomalaista ja suomenruotsalaista viittomakieltä käyttäviltä, miten kielelliset oikeudet ovat heidän kohdallaan toteutuneet. Kyselyssä nousivat esille erityisesti tulkkaukseen liittyvät haasteet viranomaisasiointissa ja viittomakielisen tiedon puute.

◇原注(文中で言及されている参考文献など)

16 https://julkaisut.valtioneuvosto.fi/bitstream/handle/10024/162839/OM_2021_4_SO.pdf?sequence=4&isAllowed=y

■ 語句・文法

toteutettiin「実現された、実施された」受過 < toteuttaa/toimesta「行動により、指示により」[出] < toimi/Viittoma-kieli-barometri「手話言語指標、手話言語バロメーター」/kansalais-kysely「市民調査、市民アンケート」/selvitettiin「明らかにされた」受過 < selvittää/käyttäviltä「使用する人々から、使用する人々を対象に」[複奪] < käytävä 能現分 < käyttää(この語が奪格になっているのは kysely のせいです。kysyä や kysellä など「尋ねる」という意味をもつ動詞、あるいは kysely のように「尋ねること」という意味をもつ名詞は、奪格など「～から」を意味する格を要求します。「～から答えを引き出す」という考え方でしょうか。) /heidän kohdallaan「彼らにおいては、彼らのところでは」(kohdallaan [接]+ 複 3 所接 < kohta) /nousta esille「現れる、明らかになる」/tulkkaukseen「通訳へ」[入] < tulkkaus < tulkata/liittyvät「結びつくような、かかわるような」[複主] < liittyvä 能現分 < liittyä /haasteet「課題」[複主] < haaste < haastaa /viran-omaisasiointissa「公的機関でのやり取りにおいて」[複内] < -asiointi < asioida < asia /puute「不足」 < puuttua

● フィンランド語理解のための訳例

2020 年に|実現された|法務省の|指示により|最初の|「手話言語指標 2020 市民調査」を、|それにより|明らかにされた|フィンランドの|そして|スウェーデン語系フィンランドの|手話言語を|使用する人々から、|どのように|言語的な|権利は|彼らにおいて|実現している。調査で|のぼった|前へ|とくに|通訳に|結びつくような|課題が|公的機関でのやり取りにおいて|そして|手話言語による|情報の|不足。

◎ 意訳

2020 年には法務省により最初の「手話言語指標 2020 市民調査」が実施されたが、そこではフィンランド手話言語およびスウェーデン語系フィンランド手話言語の使用者たちを対象に、彼らの言語的権利がいかに実現しているのかが明らかにされた。その調査においては、とくに公的機関でのやり取りにおける通訳に関連する課題や、手話言語による情報の不足といった問題が浮き彫りになった。

【39】手話言語委員会が 2021 年に設立される

Pääministeri Sanna Marinin hallitusohjelman (2019-2023) mukaisesti on perustettu laaja-alainen viittomakieliasiaihin neuvottelukunta toimikaudeksi 11.2.2021–10.2.2025. Se on asetettu viittomakielilain (359/2015) tavoitteiden toteutumisen arvioimista varten ja suomalaista ja suomenruotsalaista viittomakieltä käyttävien yhdenvertaisuuden, osallisuuden ja perusoikeuksien edistämiseksi.

■ 語句・文法

Sanna Marin (1985-) は 2019 年から 2023 年まで首相を務めた社民党所属の政治家 / hallitusohjelman 「政府の施政方針の、政府の政策綱領の」 [属] < -ohjelma / on perustettu 「設立された」 受完 < perustaa / laaja-alainen 「広い分野での、広範な」 / viittoma-kieli-asiain 「手話言語問題の、手話言語事項の」 [2 属] < -asia / neuvottelu-kunta 「審議会を、委員会を」 [主対] / toimikaudeksi 「任期として」 [変] < -kausi / on asetettu 「設定された、設置された」 受完 < asettaa / toteutumisen 「実現することの」 [属] < toteutuminen 動名 < totetutua / arvioimista varten 「評価するために」 (arvioimista [分] < arvioiminen 動名 < arvioida) / yhden-vertaisuuden 「平等の」 [属] < -vertaisuus / osallisuuden 「社会参加の」 [属] < osallisuus < osallinen < osa / perusoikeuksien 「基本的権利の」 [複属] < -oikeus / edistämiseksi 「促進するために」 [変] < edistäminen 動名 < edistää < esi-

● フィンランド語理解のための訳例

首相 | Sanna Marin の | 政府の政策綱領 (2019-2023) の | したがって | 設立された | 広範な | 手話言語問題の | 審議会を | 活動期間として | 2021 年 2 月 11 日から 2025 年 2 月 10 日。それを | 設置された | 手話言語法 (2015 年第 359 号法令) の | 目的の | 実現することの | 評価すること | のために | そして | フィンランドの | そしてスウェーデン語系フィンランドの | 手話言語を | 使う人々の | 平等の、 | 社会参加の | そして | 基本的権利の | 促進するために。

◎ 意訳

Sanna Marin 首相による「政府の政権綱領 (2019-2023)」にしたがい、2021 年 2 月 11 日から 2025 年 2 月 10 日までを任期として広範な手話言語問題委員会が設置された。同委員会は手話言語法 (2015 年第 359 号法令) の目的が実現しているのかを評価するために、そしてフィンランド手話言語およびスウェーデン語系フィンランド手話言語の使用者たちの平等、社会参加、さらに基本的権利を促進するために設置されたものである。

【40】「国連協会」は手話言語による教育について大きな懸念を表明

Suomen YK-liitto on tuonut esiin huolensa viittomakielisen opetuksen järjestämisestä. Sen mukaan viittomakieltä äidinkielenä käyttävien lasten oikeus oman äidinkielen opetukseen toteutuu nykyään harvoin. Viittomakieltä osaavan tulkin läsnäolo ei vastaa opetuksen tarjoamista viittomakielellä. Myös kuntien vaihtelevat resurssit kohdentaa avustajaresurssia viittomakielisille lapsille luovat haasteen yhdenvertaisuuden toteutumiselle ja lapsen ja nuoren oikeudelle saada opetusta omalla äidinkielellään.

■ 語句・文法

YK-liitto「国連協会」(国際連合に関する理解を深めることなどを目的に1954年に設立された非営利組織) / tuoda esiin「表明する、取り上げる」 / huolensa「(自らの)不安を、懸念を」[属対]+単3所接 < huoli / järjestämisestä「催すことについて、開催することについて」[出] < järjestäminen 動名 < järjestää / käyttävien「使うような」[複属] < käyttävä 能現分 < käyttää / toteutua「実現する」 < toteuttaa / harvoin「まれに」 / osaavan「できるような」[属] < osaava 能現分 < osata / tulkin「通訳の」[属] < tulkki / läsnä-olo「同席」(olo < olla) / ei vastaa「相当しない」 単3現否 < vastata / tarjoamista「提供することに／を」[分] < tarjoaminen 動名 < tarjota / kuntien「(基礎)自治体の」[複属] < kunta / vaihtelevat「さまざまな、異なるような」[複主] < vaihteleva 能現分 < vaihdella / resurssit「資金は、資源は」[複主] < resurssi / kohdentaa「向ける、割り当てる」 / avustaja-resurssia「補助者(を配置するための)資金を」[分] < -resurssi / luovat「作り出す」複3現 < luoda / haasteet「課題を」[複主対] < haaste / toteutumiselle「実現することへ」[向] < toteutuminen 動名 < toteutua

● フィンランド語理解のための訳例

フィンランドの|国連協会は|もってきている|前へ|自らの懸念を|手話言語による|教育の|開催することについて。その|よれば|手話言語を|母語として|使用するような|子どもたちの|[権利は|自らの|母語の|教育への]|実現する|現在では|まれに。手話言語を|できるような|通訳の|同席は|相当しない|教育の|提供することに|手話言語により。また|自治体の|さまざまな|資金は|[割り当てるための|補助者(を配置するための)資金を|手話言語話者である|子どもたちへ]|作り出す|課題を|平等の|実現することへ|そして|子どもの|そして|若者の|権利へ|[得るための|教育を|自らの|母語により]。

◎ 意識

フィンランド国連協会は手話言語による教育の実施について懸念を表明している。それによれば、手話言語を母語として使用する子どもたちの母語教育に対する権利は、現在ではまれにしか保障されていない。手話言語のできる通訳が〈授業に〉同席することは、手話言語による教育を提供することには当たらない。また自治体によって、手話言語話者である子どもたちのために補助者を配置する予算を割り当てる資源〈の大きさ〉が異なっていることにより、平等の実現や、あるいは子どもた

ちや若者たちが自らの母語により教育を受ける権利に対して課題が生じている。

【41】2022年には「言語政策プログラム」が策定されている

Pääministeri Sanna Marinin hallitusohjelman (2019-2023) mukaisesti on laadittu kielipoliittinen ohjelma¹⁷, jossa otetaan huomioon muut Suomessa puhutut kielet kuin kansalliskielet, erityisesti saamen kielet, romanikieli, karjalan kieli ja viittomakielet. Kielipoliittinen ohjelma on ensimmäinen kokonaisvaltainen kielipoliittinen ohjelma, jossa tarkastellaan muiden kuin kansalliskielten asemaa Suomessa. Kielipoliittisen ohjelman tavoitteena on vastata eri kieliryhmien osalta tunnistettuihin haasteisiin. Sen tavoitteita ovat kotoperäisten kielten suojaaminen, elvyttäminen, tukeminen ja vahvistaminen. Lapset ja nuoret ovat kielipoliittisen ohjelman keskiössä: kielten siirtyminen sukupolvelta toiselle on kyettävä turvaamaan myös tulevaisuudessa.

◇原注(文中で言及されている参考文献など)

17 Kielipoliittinen ohjelma. Valtioneuvoston periaatepäätös.

https://julkaisut.valtioneuvosto.fi/bitstream/handle/10024/163014/OKM_2021_25.pdf?sequence=1&isAllowed=y

■ 語句・文法

on laadittu「作られている、策定されている」受完 < laatia/otetaan huomioon「考慮に入れられている」(otetaan 受現 < ottaa, huomioon[入]< huomio) / puhutut「話されているような」[複主対]< puhuttu 受過分 < puhua/kokonais-valtainen「総合的な、包括的な」/ tarkastellaan「検討される、確認される」受現 < tarkastella/muiden kuin kansallis-kielten「国語以外の他(の言語)の」/ eri kieli-ryhmien osalta「さまざまな言語集団に関して」/ tunnistettuihin「認識されているような、特定されているような」[複入]< tunnistettu 受過分 < tunnistaa/haasteisiin「課題へ」[複入]< haaste/koto-peräisten「土着の、固有の」[複属]< -peräinen/suojaaminen「保護すること」動名 < suojata/elvyttäminen「再活性化させること」動名 < elvyttää < elpyä < elää/vahvistaminen「強化すること」動名 < vahvistaa < vahva/keskiössä「中心に、中核に」[内]< keskiö < keski-/siirtyminen「移ること」動名 < siirtyä/suku-polvelta toiselle「世代から世代へ」/on kyettävä「できなければならない」(kyettävä 受現分 < kyetä + MA 不[入]⇒ kyky) / turvaamaan「保障する、守る」MA 不[入]< turvata < turva

● フィンランド語理解のための訳例

首相 | Sanna Marin の | 政府の政策綱領 (2019-2023) の | したがって | 作成されている | 言語政策の | プログラムを、 | そこでは | とられている | 考慮へ | 他の | フィンランドで | 話されている | 言語を | [よ
うな | 国語、 | とくに | サーミ諸語、 | ロマニ語、 | カレリア語 | そして | 手話諸言語。言語政策の | プログラム
は | である | 最初の | 包括的な | 言語政策の | プログラム、 | そこで | 検討される | [他の | 国語以外の] |
地位を | フィンランドにおける。言語政策の | プログラムの | 目的として | ある | 応えることが | [さまざま

な|言語集団の|部分から]|認識されているような|課題へ。その|目的|である|固有の|諸言語の|保護すること、|再活性化させること、|支援すること|そして|強化すること。子どもたちは|そして|若者たちは|いる|言語政策の|プログラムの|中心に:|言語の|移ることは|世代から|次へ|できなければならない|守る|また|将来において。

◎意訳

Sanna Marin 首相による「政府の政権綱領(2019-2023)」にしたがい言語政策プログラムが策定されているが、そこでは国語であるフィンランド語とスウェーデン語や、とくにサーミ語、ロマニ語、カレリア語、そして手話言語などフィンランドで話されている言語が考慮に入れられている。この言語政策プログラムは、フィンランドにおける国語以外の言語の地位を検討する初めての包括的なプログラムである。言語政策プログラムの目的となっているのは、さまざまな言語集団に関して明らかになっている課題に答えることである。その目的は伝統的に存在してきた言語を保護・再活性化・支援し、そして強化することである。子どもと若者が言語政策プログラムの中心におかれる:世代から世代への言語の継承は将来においても保障されなければならない<からだ>。

★補足

「言語政策プログラム」(2022年)は次の URL からダウンロードできます。

Suomen kielipoliittinen ohjelma <<https://julkaisut.valtioneuvosto.fi/handle/10024/164216>>URL<

【42】「言語政策プログラム」には手話言語に関する多数の施策も

Kielipoliittinen ohjelma sisältää useita viittomakieliin liittyviä toimenpide-ehdotuksia.

■語句・文法

sisältää「含む」< sisä- / useita「多くの」[複分]< usea / liittyviä「結びつくような、関係するような」[複分]< liittyvä 能現分 < liittyä / toimenpide-ehdotuksia「行動提案を、施策提案を」[複分]< -ehdotus < ehdottaa < ehto

●フィンランド語理解のための訳例

言語政策の|プログラムは|含む|多くの|手話言語へ|結びつくような|行動提案を。

◎意訳

言語政策プログラムには、手話言語にかかわるような多くの施策に関する提案が含まれている。

【43】幼児教育・基礎教育に関する法律を更新する必要性も検討

Lisäksi selvitetään varhaiskasvatuksen ja perusopetuksen lainsäädännön päivitystarpeet viittomakielilain ja YK:n vammaissopimuksen mukaiseksi, sekä jatketaan suomenruotsalaisen viittomakielen elvytysohjelmaa muun muassa määrittelemällä kielen tutkimuksen vastuutaho.

■ 語句・文法

varhaiskasvatuksen「幼児教育の、初期教育の」[属] < kasvatus < kasvattaa / päivitystarpeet 「更新の必要性を」[複主対] < tarve (päivitys < päivittää < päivä) / jatketaan「続けられる」受現 < jatkaa / määrittelemällä「特定することにより、明らかにすることにより」 / vastuu-taho「責任機関を」[主対]

● フィンランド語理解のための訳例

加えて|明らかにされる|幼児教育の|そして|基礎教育の|法令の|更新の必要性を|手話言語法の|そして|国連の|障害者条約の|したがうように、|さらに|続けられる|スウェーデン語系フィンランドの|手話言語の|再活性化プログラムを|なかでも|特定することにより|言語の|研究の|責任機関を。

◎ 意訳

〈言語政策プログラムにおいては〉さらに手話言語法と障害者条約に合致するよう幼児教育と基礎教育に関する法令を更新する必要性が明らかにされたが、加えて、とくにスウェーデン語系フィンランド手話言語の研究に責任を負う機関を明確にすることにより、同言語の再活性化プログラムが、継続される。

【44】Jyväskylä 大学と Helsinki 大学が手話言語の研究を担当

Vuoden 2010 alussa Jyväskylän yliopistossa aloitti toimintansa Viittomakielen keskus, jossa tehdään suomalaisen viittomakielen tutkimusta ja annetaan viittomakieleen liittyvää koulutusta. Vuoden 2021 alusta lähtien Helsingin ja Jyväskylän yliopistot ovat vastanneet suomenruotsalaisen viittomakielen tutkimuksesta.

■ 語句・文法

aloitti toimintansa「その活動を始めた」(toimintansa [属対] + 単 3 所接 < toiminta) / annetaan「与えられる」受現 < antaa / liittyvää「結びつくような」[分] < liittyvä 能現分 < liittyä / lähtien「～以降、～以来」e 不 [具] < lähteä / ovat vastanneet「責任を負っている、担当している」複 3 完 < vastata

● フィンランド語理解のための訳例

2010 年の|初めに|Jyväskylä の|大学において|始めた|(自らの)活動を|手話言語センターが、

|そこでは|行われる|フィンランドの|手話言語の|研究を|そして|与えられる|手話言語へ|結びつく
ような|教育を。2021 年の|初めから|以来|Helsinki の|そして|Jyväskylä の|大学は|責任を負って
いる|スウェーデン語系フィンランドの|手話言語の|研究について。

◎意訳

2010 年初めに Jyväskylä 大学において「手話言語センター」が活動を開始し、そこではフィンランド手話言語の研究を行うとともに手話言語に関係する教育研修を実施している。2021 年の初め以降、Helsinki 大学と Jyväskylä 大学がスウェーデン語系フィンランド手話言語の研究について責任を負っている。

【45】手話言語教育の開発プロジェクトへ教育文化省が資金援助を

Opetus- ja kulttuuriministeriö myönsi vuonna 2018 rahoitusta Opettajankoulutuksen kehittämisohjelman toimeenpanoon suomalaisen viittomakielen opetuksen kehittämishankkeelle.

■語句・文法

myönsi「認めた」単 3 過 < myöntää / Opettajan-koulutuksen kehittämis-ohjelman「教員（養成）教育の開発プログラムの」（kehittämis- < kehittäminen 動名 < kehittää） / toimeen-panoon「実行へ、実施へ」[入] < -pano（なお、rahoitusta Opettajan-koulutuksen kehittämis-ohjelman toimeen-panoon「教員養成教育の開発プログラムの実行のための資金を」全体が myönsi「認めた」の目的語になっていると考えるとよいと思います。） / kehittämis-hankkeelle「開発プロジェクトへ」[向] < hanke

●フィンランド語理解のための訳例

教育文化省は|認めた|2018 年に|[資金を|教員養成教育の|開発プログラムの|実施へ]|フィンランドの|手話言語の|教育の|開発プロジェクトへ。

◎意訳

教育文化省は 2018 年にフィンランド手話言語の教育開発プロジェクトに対して、「教員養成教育開発プログラム」の実施のための資金援助を認めている。

【46】手話言語のデジタル教材の開発も

Samalla on kehitetty valtakunnalliseen käyttöön viittomakielen opetuksen digitaalista oppimateriaalia.

■語句・文法

on kehitetty「開発された」受完 < kehittää / valta-kunnalliseen käyttöön「全国的な利用へ」[入] < valta-kunnallinen käyttö / digitaalista oppi-materiaalia「デジタル学習教材を」[分] <

digitaalinen oppi-materiaali

●フィンランド語理解のための訳例

同時に|開発された|全国的な|利用へ|手話言語の|教育の|デジタルの|学習教材を。

◎意訳

同時に、全国で利用できるよう手話言語教育のためのデジタル学習教材が開発された。

【47】フィンランド語教員と手話言語教員により共同授業の試み

Muutamissa kunnissa toteutettu suomi-viittomakieli -yhteisopettajuus on edistänyt viittomakielisten oppilaiden mahdollisuuksia saada opetusta viittomakielellä ja kehittyä kaksi- tai monikieliseksi ja -kulttuuriseksi.

■語句・文法

muutamissa kunnissa「いくつかの(基礎)自治体で」[複内]< muutama kunta / toteutetu「実現されたような」/ suomi-viittomakieli -yhteisopettajuus「フィンランド語教員・手話言語教員による共同指導」(yhteisopettajuusとは、複数の教員が平等な立場で授業準備や指導、そして評価を行う教育方法を意味するようです) / kaksi- tai monikieliseksi ja -kulttuuriseksi「二言語・二文化、あるいは多言語・多文化の人間へ」[変]< -kielinen ja -kulttuurinen

●フィンランド語理解のための訳例

いくつかの| (基礎)自治体で| 実現されたような| フィンランド語(教員)・手話言語(教員)による共同指導は| 促進している| 手話言語話者である| 生徒たちの| [可能性を| 得る| 教育を| 手話言語により| そして| 成長する| 二言語・二文化| あるいは多言語・多文化の人間へ]。

◎意訳

いくつかの基礎自治体において実現されているフィンランド語教員と手話言語教員による共同指導は、手話言語話者である生徒が手話言語により教育を受ける機会を拡大し、彼らが二言語・二文化、あるいは多言語・多文化の人間へと成長する可能性を促進している。

【48】スウェーデン語系フィンランド手話言語に対する支援も

Opetus- ja kulttuuriministeriö on rahoittanut vuonna 2019-2020 hanketta, jossa on levitetty tietoa suomenruotsalaisesta viittomakielestä, ja mm. käynnistetty suomenruotsalaisen viittomakielen yhteistyöverkosto. Vuosina 2020 ja 2021 opetus- ja kulttuuriministeriö on myöntänyt rahoitusta suomenruotsalaisen viittomakielen elvytysohjelman toimeenpanon koordinointiin, suunnitteluun ja toteutukseen. Saadulla rahoituksella on muun muassa koulutukseen liittyvän elvytystyön lisäksi myös edistetty kielineuvontaa, innostettu kielenkäyttäjiä ja lisätty tiedotusta.

■ 語句・文法

opetus- ja kulttuuri-ministeriö「教育文化省」／on levitetty「流布された、広められた」受完 < levittää／mm. = muun muassa「なかでも、とりわけ」／(on) käynnistetty「起動された、開始された」受完 < käynnistää < käynti < käydä／yhteis-työ-verkosto「協力ネットワークを」[主対]／on myöntänyt「認めた」単 3 完 < myöntää／elvytys-ohjelman「再活性化プログラムの」[属] < -ohjelma／toimeen-panon「実施の」[属] < -pano／koordinoointiin「調整へ、コーディネートすることへ」[入] < koordinointi < koordinoida／suunnitteluun「計画へ」[入] < suunnittelu < suunnitella／toteutukseen「実現へ、実施へ」[入] < toteutus < toteuttaa／saadulla rahoituksella「得られた資金により」[接] < saatu rahoitus (saatu 受過分 < saada)／koulutukseen liittyvän「教育に関係するような」(koulutukseen [入] < koulutus, liittyvän [属] < liittyvä 能現分 < liittyä)／elvytystyön「再活性化作業の」[属] < -työ／(on) edistetty「促進された」受完 < edistää／kieli-neuvontaa「言語相談を、言語カウンセリングを」[分] < -neuvonta < neuvoa／(on) innostettu「鼓舞された」受完 < innostaa < into／(on lisätty)「増やされた」受完 < lisätä／tiedotusta「広報を」[分] < tiedotus < tiedottaa < tieto < tietää

● フィンランド語理解のための訳例

教育文化省は|資金援助している|2019 から 2020 年に|企画を、|そこでは|広められている|情報を|スウェーデン語系フィンランドの|手話言語について、|そして|なかでも|開始されている|スウェーデン語系フィンランドの|手話言語の|協力ネットワークを。2020 年と 2021 年に|教育文化省は|認めている|資金を|スウェーデン語系フィンランドの|手話言語の|再活性化プログラムの|実施の|調整へ、|計画へ|そして|実現へ。得られたような|資金により|なかでも|教育へ|結びつくような|再活性化作業の|加えて|また|促進されている|言語相談を、|鼓舞されている|言語使用者たちを|そして|増やされている|広報を。

◎ 意訳

教育文化省は 2019 年から 2020 年にかけてある企画に資金援助しているが、そこではスウェーデン語系フィンランド手話言語に関する情報を広め、とりわけスウェーデン語系フィンランド手話言語の協力ネットワークが始動されている。2020 年と 2021 年には教育文化省は、スウェーデン語系手話言語の再活性化プログラムの実施を調整、計画、実現するために資金援助を認めている。〈それにより〉得られた資金により、とくに教育にかかわる再活性化作業に加え、言語相談を促進し、〈スウェーデン語系フィンランド手話〉言語の使用者たちを鼓舞し、また〈スウェーデン語系フィンランド手話言語に関する〉広報活動を増やしている。

【49】yle (フィンランド公共放送) も手話言語による放送を拡大

Ylen viittomakielinen ohjelmatarjonta on laajentunut viime vuosina viittomakielisistä uutisista ja ajankohtaisohjelmista viitotuiksi erityislähetyksiksi. On myös viitottuja lastenohjelmia.

■ 語句・文法

Ylen「Yle (フィンランド公共放送) の」[属]< Yle (Yleis-radio Oy の略で、日本の NHK に相当するものだと考えてよいと思います。) / ohjelma-tarjonta「番組提供」(tarjonta < tarjota) / on laajentunut「広がっている」単 3 完 < laajentua < laajentaa < laaja / viittoma-kielisistä uutisista「手話言語によるニュースから」[複出]< viittoma-kielinen uutinen / ajan-kohtais-ohjelmista「時事番組から」[複出]< -ohjelma / viitotuiksi「手話言語のサインの使われるような、手話言語による」[複変]< viitottu 受過分 < viittoa < viitta / erityis-lähetysiksi「特別放送へ」[複変]< -lähetys < lähettää / viitottuja「手話言語のサインの使われるような、手話言語による」[複分]< viitottu 受過分 < viittoa < viitta / lasten-ohjelmia「子ども番組」[複分]< -ohjelma

● フィンランド語理解のための訳例

Yle の | 手話言語による | 番組提供は | 広がっている | 近年 | 手話言語による | ニュースから | そして | 時事番組から | 手話言語を使うような | 特別放送へ。ある | また | 手話言語を使うような | 子ども番組。

◎ 意訳

Yle (フィンランド公共放送) の手話言語による番組提供は、手話言語によるニュースや時事番組から、手話言語による特別放送へと拡大している。また、手話言語による子ども番組もある。

★ 補足

yle の手話言語による番組は次の URL からみることもできます。

Viittomakieliset ohjelmat Yle Areenassa <<https://areena.yle.fi/tv/ohjelmat/57-bN67eKroa>>

【50】「母語と文学」の教科を手話言語で学ぶ子どもたちの数は？

Äidinkieli ja kirjallisuus on monikielinen oppiaine. On eri kielivaihtoehtoja, joille on laadittu omat perusteet (saame, romani ja viittomakieli). Vuonna 2020 saamen kieltä ja kirjallisuutta opiskeli 7–9 luokilla yhteensä 378, romanikieltä ja kirjallisuutta 1–4 ja viittomakieltä ja kirjallisuutta 21 oppilasta sekä muuta oppilaan äidinkieltä 204 oppilasta.

■ 語句・文法

äidin-kieli ja kirjallisuus「母語と文学」(学校における教科名で、日本における「国語」に相当します) / oppi-aine「教科目」 / kieli-vaihto-ehdoja「言語の選択肢が」[複分]< -ehto / on laadittu「作られている、策定されている」受完 < laatia / perusteet「基準を」[複主対]< perusta / luokilla「学年において」[複接]< luokka

● フィンランド語理解のための訳例

「母語と文学」は | である | 多言語の | 教科目。ある | ささまざまな | 言語選択肢が、 | それらへ | 策定されている | 自分の | 基準が | (サーミ語、ロマニ語、そして手話言語)。……2020 年に | サーミ語と文学

を|勉強した|7 から 9 学年で|合計で|378 名の、|ロマニ語と文学を|1 から 4 名の|そして|手話言語と文学を|21 名の|生徒が|さらに|他の|生徒の|母語を|204 名の|生徒が。

◎意訳

「母語と文学」は多言語の教科目である。さまざまな言語の選択肢があり、それらに対してはそれぞれの基準が(サーミ語、ロマニ語、手話言語くの授業について)策定されている。……2020 年に 7 年生から 9 年生で「サーミ語と文学」を勉強したのは合計で 378 名、「ロマニ語と文学」は 1 名から 4 名、そして「手話言語と文学」は 21 名の生徒が勉強し、さらに他の母語を勉強した生徒が 204 名となっている。

【51】「障害」という視点と「言語」という視点

Viittomakielistä yhteisöä tarkastellessa esiin nousevat sekä vammaisuuden että kielen näkökulma. Lapsia tarkastellaan usein vain vamman kautta, minkä vuoksi lapsen asema esimerkiksi opetuksessa on hyvin erilainen kuin muilla kielillä. Vamma halutaan usein parantaa, minkä takia esimerkiksi kielipesätoiminta ja viittomakielen vahvistaminen saatetaan kyseenalaistaa. Käytännössä viittomakielisiä lapsia tarkastellaan edelleen vammaisuus-, eikä kielinäkökulmasta.

■ 語句・文法

yhteisöä「共同体を、コミュニティーを」[分]<yhteisö<yksi/tarkastellessa「調べるとき」e 不[内]<tarkastella[時構]/nousta esiin「現れる、明らかになる、浮き彫りになる」/näkö-kulma「視点」/tarkastellaan「調べられる」受現 <tarkastella/minkä vuoksi「そのために」(minkä[属]<mikäは前の節の内容を受ける関係詞)/muilla kielillä「他の言語における」[複接]<muu kieli/vamma「障害を」[主対](この vamma は主格の形をした対格目的語で parantaa「改善する」の目的語)/halutaan「望まれる」受現 <haluta/minkä takia「そのために」/kieli-pesä-toiminta「言語巢活動」(kieli-pesä「言語巢」とはニュージーランドにおいて先住民族の言語であるマオリ語の再活性化のために生み出されたものだとされています。子どもたちに対して当該言語のみが使われるような環境を提供して言語習得を促そうとする試みです。)/vahvistaminen「強化すること」動名<vahvistaa<vahva/saatetaan「かもしれない、可能性がある」受現 <saattaa/kyseen-alaistaa「疑う、疑問を投げかける」/käytännössä「実際に、現実的に」[内]<käytäntö

●フィンランド語理解のための訳例

手話言語の|共同体を|調べるとき|前に|上がってくる|障害をもつことの|そして|言語の|視点が。子どもを|調べられる|しばしば|ただ|障害を|通して、|その|ために|子どもの|地位は|たとえば|教育における|である|とても|異なる|他の言語によるのとは。障害を|望まれる|しばしば|改善する、|その|ために|たとえば|言語巢活動は|そして|手話言語の|強化することは|かもしれない|疑問を投げかける。実際に|手話言語話者である|子どもたちを|調べられる|依然として|障害の<視点から>、|言語の視点からではなく。

◎意訳

手話言語話者たちのコミュニティーを研究すると、障害という視点と言語という視点の両方が浮き彫りになる。〈しかし〉子どもたちはしばしば障害のみを通してみられるために、たとえば教育における手話話者児童の地位というものは他の言語を話す子どもたちとは異なったものとなっている。障害は改善することが望まれるために、たとえば言語巢活動や手話言語の強化などは疑問を投げかけられる可能性がある。現実には手話話者である子どもたちは、言語という視点からではなく依然として障害者であるという視点からみられている。

★補足

「障害という視点と言語という視点」という点で大きな問題となっているのが「人工内耳」のようです。まず人工内耳について文献から引用しておきます。

📖参考図書

齊藤くるみ. 2007. 『少数言語としての手話』. 東京大学出版会.

人工内耳とは内耳に電極を挿入し、音を電気信号に変換して聴覚神経に伝える人工臓器とも言えるものである。耳の裏側を切開して、頭蓋骨にインプラントと呼ばれるコンピューターチップを取り付けて、その端から伸びている細いケーブルの先端部（電極アレイ）を蝸牛の中に挿入する。インプラントには磁石が内蔵されているので、ヘッドピースという磁石の入った小さな器具を頭の外側からインプラントにつけることができる。ヘッドピースは使用者が携帯するサウンドプロセッサというトランジスタラジオ型（または耳にかける補聴器型）の機械につながっており、これが音を電気刺激に変えて内耳の電極に送り込むのである。それを脳は音と感じるのである。（齊藤 2007: 187）

また本資料の冒頭で挙げた上倉・吉田の論文でも人工内耳について解説していますので、参考にしてください。

それでは、人工内耳と手話言語について考えていきます。

【52】かつては「ろう者」イコール「手話言語話者」だったのだが

Aiemmin kuurouteen on liittynyt sisäänrakennettuna taustaoletus, että kuuro ihminen on myös viittomakielinen. Nykyisen hoitokäytännön myötä tämä asia muuttuu, sillä vallitsevan hoitokäytännön myötä voi olla audiologisesti kuuro, osaamatta viittomakieltä. Aiemmin on ollut käsitteellisesti ja käytännössä mahdotonta puhua kuuroista ilman, että se tarkoittaisi samalla viittomakielisiä.

■語句・文法

aiemmin「以前は」／kuurouteen「ろう（者）であることへ」[入] < kuurous < kuuro / on liittynyt「結びついてた」単 3 完 < liittyä / sisään-rakennettuna「内蔵されたものとして、組み込まれたものとして」[様] < -rakennettu (rakennettu 受過分 < rakentaa) / tausta-oletus「前提（議論にお

いて言明されず前提とされることで、直訳すれば「背景前提、背景想定」とでもなります。哲学の世界では何か用語があるのかもしれませんが。)」／hoito-käytännön「治療実践の」[属]<-käytänne (hoito < hoitaa)／myötä「～にともなって、～につれて」／vallitsevan「支配的となっているような」[属]< vallitseva 能現分 < vallita／audiologisesti「聴覚的に」[副]< audiologinen／osaamatta「できずに」MA 不[欠]< osata／käsitteellisesti「概念上、概念的に」[副]< käsitteellinen < käsite < käsittää／käytännössä「現実的に、実際に」[内]< käytäntö／ilman, että ~「～ということなしで」／tarkoittaisi「意味するだろう」[条]単 3 現 < tarkoittaa

●フィンランド語理解のための訳例

以前は|ろう(者)であることへ|結びついていた|組み込まれたものとして|前提が、|[だという|ろうの|人間は|である|また|手話言語話者。現在の|治療実践の|ともなって|この|ことは|変化する、|というのも|支配的となっている|治療実践の|ともなって|ありうる|である|聴覚的に|ろう者で、|できずに|手話言語を。以前は|であった|概念的に|そして|実際に|不可能な|話すことは|ろう者について|[なしで|ということ|それは|意味するだろう|同時に|手話言語話者であることを]。

◎意訳

以前であれば、「ろう」の人間は同時に手話言語話者であるという前提が「ろう」であるということには結びついていた。現在の治療実践にともない、このことも変化している。なぜなら、支配的となっている治療実践にとともなって、手話言語ができなくとも聴覚的には「ろう」であることが可能になっているからである。以前であれば、同時に手話話者であることを意味することなく「ろう者」たちについて話すということは、概念上も実際にも不可能だった。

★補足

日本においても、木村・市田(2000: 8)は「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数派 である」と定義しています。個人的に私は、この主張を支持したいと思いますが、現実的に「ろう者」が「手話言語」を学ぶ機会を十分に保障されているのかはまた別の問題です。むしろ、「ろう者」が「日本手話話者」として十全に成長できるような社会へと我々が変わっていくべきことを上の引用は求めているのだと思います。

□参考図書

木村晴美・市田泰弘. 2000. 「ろう文化宣言—言語的少数派としてのろう者」. 現代思想編集部編 『ろう文化』 青土社. 8-17 ページ.

【53】子どもに人工内耳の手術が行われるようになったのは 1997 年

Vuonna 1997 alettiin Suomessa leikata lapsille sisäkorvaistutteita. Suurin osa kuuroista lapsista syntyy kuuleville vanhemmille. Nyt 2010-luvulla 90 prosentille kuuroista lapsista asennetaan sisäkorvaistute leikkauksella. Viittomakielen käyttö ensikielenä on vähentynyt.

■ 語句・文法

alettiin「始められた」受過 < alkaa/leikata「切る、手術する」/ sisä-korva-istutteita「人工内耳を（内耳インプラントを）」[複分]< -istute < istuttaa < istua/suurin「最大の」最 < suuri/kuuroista lapsista「ろうである子どもたちのうち」[複出]< kuuro lapsi/kuuleville vanhemmille「聞こえる親の元へ」(kuuleville [複向]< kuuleva 能現分 < kuulla) / asennetaan「設置される」受現 < asentaa/leikkauksella「手術により」[接]< leikkaus < leikata/ensikielenä「第一言語として」[様]< -kieli/on vähentynyt「減っている」単 3 完 < vähentyä < vähentää < vähä

● フィンランド語理解のための訳例

1997年に|始められた|フィンランドで|手術する|子どもたちへ|人工内耳を。最大の|部分は|ろうである|子どもたちのうち|生まれる|聞こえるような|親へ。今|2010年代に|90パーセントへ|ろうである|子どもたちのうち|設置される|人工内耳を|手術により。手話言語の|使用は|第一言語として|減ってきている。

◎ 意訳

フィンランドでは1997年に子どもに対する人工内耳の手術が開始された。ろうであることどもたちの大部分は聴者である親の元に生まれる。そして2010年代の現在では、ろう児のうち90パーセントの子どもたちに手術により人工内耳が埋め込まれている。〈それにともない〉第一言語としての手話言語の使用は減少している。

【54】医学は「ろう」であることを取り除くことはできない

Ainakaan toistaiseksi lääketiede ei onnistu poistamaan kuuroutta kokonaan. Audiologisesti syntymäkuuro on täysin kuuro, kun istute on pois toiminnasta. Koska audiologista kuuroutta ei voida kokonaan poistaa, ei ole perusteluja vähentää viittomakielen käyttöä osana hoitokäytännettä.

■ 語句・文法

ainakaan「少なくとも」⇒ ainakin/toistaiseksi「現時点では、これまでのところ」< toistainen < toinen/ei onnistu「成功しない」(+MA不[入])/poistamaan「取り除く」MA不[入]< poistaa < pois/kokonaan「完全に」/syntymäkuuro「生まれながらのろう、先天性ろう」/täysin「完全に」[複具]< täysi/on pois toiminnasta「機能していない」(toiminnasta[出]< toiminta < toimia) / ei voida「できない」受現否 < voida/perusteluja「根拠」[複分]< perustelu < perustella/osana hoito-käytännettä「治療実践の一部として」

● フィンランド語理解のための訳例

少なくとも|現時点では|医学は|成功しない|取り除く|ろうであることを|完全に。聴覚的に|生まれながらのろうは|である|完全に|ろう、|【ときに|インプラントは|機能していない】。[なぜなら|聴覚的な|ろうであることを|できない|完全に|取り除く]、|ない|根拠は|減らす|手話言語の|使用を

|[一部として|治療実践の]。

◎意訳

少なくとも現時点で医学は「ろう」であることを完全に排除することに成功はしていない。〈つまり〉人工内耳が機能していなければ、聴覚的に生まれながらのろう者は完全に「ろう」であるのである。聴覚的に「ろう」であることを完全には排除することができないのであれば、治療実践の一部として手話言語の使用を減らすことには根拠はない。

★補足

【51】の「★補足」で人工内耳について引用を掲載しました。それにしたがえば、たとえば「ヘッドピース」や「サウンドプロセッサ」を外せば、その人は聴覚的に完全に「ろう」であることになります。

【55】手話言語を取り上げれば、それだけ「障害」が強調されることになる

Vammaisina kuurot ovat erityistukea tarvitseva ihmisryhmä, jonka kieli on vammaa kompensoiva apuväline. Jos kieli otetaan pois, vamma korostuu. Viittomakielentaidottomuus korostaa kuuron vammaa, ei vähennä tai poista sitä. Ilman viittomakieltä kuuro on enemmän vammaisen, sillä hänellä on vähemmän kykyjä ja toimintavalmiuksia kuin viittomakielen kyvyn kanssa. Viittomakieli korostaa kuuron erityisiä kykyjä.

■語句・文法

vammaisina「障害者として」[複様]< vammaisen < vamma/erityis-tukea「特別支援を」[分]< -tuki (erityis-< erityinen) / tarvitseva「必要とするような」能現分 < tarvita / ihmis-ryhmä「人間集団」/ kompensoiva「償うような、補うような、埋め合わせるような」能現分 < kompensoida / apuväline「補助手段」/ otetaan pois「取り上げられる」(otetaan 受現 < ottaa) / korostua「強調される」< korostaa / viittoma-kielen-aidottomuus「手話言語能力のないこと」(aidottomuus < aidoton < taito) / kykyjä「能力」[複分]< kyky / toiminta-valmiuksia「行動能力(行動するための準備ができていること)、行動できる可能性」[複分]< -valmius < valmis

●フィンランド語理解のための訳例

障害者として|ろう者たちは|である|特別支援を|必要とするような|人間集団、|その|言語は|である|障害を|補うような|補助手段。もし|言語を|取り上げられれば、|障害は|強調される。手話言語能力のないことは|強調する|ろう者の|障害を、|減らさない|あるいは|取り除か(ない)|それを。[なしで|手話言語]|ろう者は|である|より多く|障害者、|というのも|その人には|ある|より少なく|能力|そして|行動能力|[よりも|手話言語の|能力の|一緒に]。手話言語は|強調する|ろう者の|特別な|能力を。

◎意訳

障害者としてのろう者は特別な支援を必要とする人々の集団であるが、その言語は障害を補うた

め的手段である。もし言語が取り上げられれば、障害が強調されることになる。手話言語の能力をもたないことによりろう者の障害は強調されることになるのであって、それは障害を減らしたり取り除くわけではない。手話言語がなければろう者はより多くの障害を抱えることになるのである。なぜなら、手話言語の能力をもつ場合よりも能力や行動の可能性がより少なくなるからである。手話言語はろう者の特別な能力というものを強調するものなのである。

【56】人工内耳手術は「聴力」の問題に対する答えでしかない

Sisäkorvaistuteleikkaus ei ole vastaus kielikysymykseen tai puheen tuoton kysymykseen, vaan kuulokysymykseen.

■ 語句・文法

kieli-kysymykseen「言語の問題へ」[入]<kysymys<kysyä/puheen「発話の」[属]<puhe<puhua/tuoton「産出の」[属]<tuotto<tuottaa/kuulo-kysymykseen「聴力の問題へ」

● フィンランド語理解のための訳例

人工内耳手術は|答えではない|言語の問題へ|あるいは|発話の|産出の|問題へ、|そうではなく|聴力の問題へ。

◎ 意訳

人工内耳手術というものは言語や発話産出の問題に対する回答ではなく、聴力の問題に対する答えに過ぎない。

【57】手話言語を捨てることは子どもにとって利益とはならない

Viittomakielestä luopumisen ei voida sanoa edistävän lapsen hyvää, kykyjä ja omaa mahdollisuutta tehdä itsenäisiä valintoja tulevaisuudessa, vaan päinvastoin, se voi haitata niitä.

■ 語句・文法

luopumisen「あきらめることの、手放すことの」[属]<luopuminen 動名 <luopua(+[出])/ei voida「できない」受現否 <voida/edistävän「促進すると」[属]<edistävä 能現分 <edistää/Viittomakielestä luopumisen ei voida sanoa edistävän「手話言語をあきらめることが促進するということはできない」[分構](sanoa「いう」という動詞が属格の名詞 viittoma-kielestä luopumisen「手話言語をあきらめること」と能動現在分詞の属格 edistävän「促進するような」をしたがえ「手話言語をあきらめることが促進するのだ」という意味の分詞構文を作っています。さらに sanoaには ei voida「できない」という受動否定形がついていますが、受動形を文の先頭に置くことは避けられる傾向にあるため、ここでは viittoma-kielestä luopumisen が文頭に置かれています。) /hyvää「よいことを、(子どもにとっての)利益を」[分]<hyvä/itsenäisiä valintoja「自立した選択を、主体的な選択を」[複分]<itsenäinen valinta/päin-vastoin「逆に」/haitata「阻害する、妨げる」<haitta

●フィンランド語理解のための訳例

手話言語から|手放すことは|できない|いう|促進すると|子どもの|利益を、|能力を|そして|自らの|可能性を|[するための|自立した|選択を|将来において]、|そうではなく|逆に、|それは|ありうる|阻害する|それらを。

◎意識

手話言語を捨てることが子どもの利益や能力、そして将来において主体的な選択をするための可能性を促進するということはできない。むしろ逆であり、手話言語を放棄することはそれらを妨げる可能性がある。

【58】二言語話者であれば、子どもの可能性はより多様なものになる

Jos lapsi on kaksikielinen, hän voi itse valita, kumpaa kieltä käyttää, jolloin hänen mahdollisuutensa ja kyvykkyytensä olisivat monipuolisemmat.

■語句・文法

kaksi-kielinen「二言語話者(の)、バイリンガル(の)」／kumpaa kieltä「どちらの言語を」[分]<kumpi kieli／jolloin「そのとき」<joka／mahdollisuutensa「(自らの)可能性は」[複主]+単₃所接< mahdollisuus／kyvykkyytensä「(自らの)ケイパビリティは、(自らの)潜在能力は」[複主]+単₃所接< kyvykkyys < kyvykäs < kyky「ケイパビリティ(英語では capability)」については資料Ⅲ-2の【17】から【23】でかなり詳しく扱っています。非常に重要な考え方だと思いますので、ぜひ確認してください。)／olisivat「~だろう」[条]複₃現< olla／moni-puolisemmat「より多様な、より多面的な」[複主]<-puolisempi 比<-puolinen < puoli

●フィンランド語理解のための訳例

もし|子どもが|である|二言語話者、|その子どもは|できる|自身で|選ぶ、|どちらの|言語を|使うか、|そのとき|その子どもの|可能性は|そして|ケイパビリティは|だろう|より多面的な。

◎意識

もし子どもが二言語話者であれば、どちらの言語を使うかを自分自身で選択することができるだろうし、そうであれば子どものもつ可能性やケイパビリティはより多様なものとなるだろう。

【59】手話言語は障害に起因する不利益を軽減する、つまり子どもの利益になる

Jos terveyttä on vamman väheneminen, voidaan sanoa, että sisäkorvaistute yleensä lieventää kuulon puutteesta aiheutuvaa haittaa ja vammaa kuulon parantumisenä, mutta viittomakielen mukana pitäminen lisäisi vammasta aiheutuvien haittojen vähentämistä vielä enemmän. Jos hyvää ovat lapsen monipuoliset kyvyt, ei voida sanoa siirtymän tapahtuneen perustellusti. Viittomakielestä luopuminen ei edistä lapsen kykyjä ja siten hänen hyvää.

■ 語句・文法

terveyttä「健康」[分]< terveys < terve / väheneminen「減ること」動名< vähetä < vähä / yleensä「一般的に」 / lieventää「緩和する、軽減する」< lievä / puutteesta「不足から」[出]< puute < puuttua / aiheutuva「引き起こされるような」[分]< aiheutuva 能現分 < aiheutua (+[出]) / haittaa「不利益を、面倒を、害を」[分]< haitta / parantumisena「改善することとして」[様]< parantuminen 動名 < parantua < parantaa ⇒ parata, parempi, paras / mukana pitäminen「携えること、身に付けておくこと」(pitäminen 動名 < pitää) / lisäisi「増やすだろう」[条]単 3 現 < lisätä / aiheutuvien「引き起こされるような」[複属]< aiheutuva 能現分 < aiheutua (+[出]) / haittojen「不利益の、面倒の、害の」[複属]< haitta / vähenemistä「減ることを」< väheneminen 動名< vähetä < vähä / siirtymän「移行が」[属]< siirtymä < siirtyä(ここでの「移行」とは「人工内耳手術にともない手話言語の習得・使用を放棄する方向へと動いてきたこと」をさしています) / tapahtuneen「起こったと」[属]< tapahtunut 能過分 < tapahtua / sanoa siirtymän tapahtuneen「移行は起こったという」[分構] / perustellusti「正当に、根拠にもとづき」[副]< perusteltu 受過分 < perustella / siten「そうして、そうすることで」< se

● フィンランド語理解のための訳例

もし健康である障害の減ることは、できるいう、[ということ人工内耳は一般的に軽減する聴力の不足から引き起こされるような不利益をそして障害を][聴力の改善することとして]、しかし手話言語を身に付けて保つことは増やすだろう[障害から引き起こされるような不利益の減ることを]さらにより多く。[もしよいことである子どもの多様な能力]、できないいう移行は起こったと根拠にもとづいて。手話言語から手放すことは促進しない子どもの能力をそしてそうして子どもの良いことを。

◎ 意訳

健康とは障害が軽減されることであるなら、人工内耳は一般的に聴力の欠如によって引き起こされる不利益や障害を聴力を改善するという形で軽減するといえるが、しかし手話言語を取り入れることは障害に起因する不利益の軽減にさらに大きく貢献するだろう。もし子どもが多面的な能力をもつことが子どもにとっての利益であるのであれば、人工内耳手術の導入にともない手話言語の習得・使用を放棄する方向へ移行してきたことは根拠にもとづくものだとはいえない。手話言語を放棄することは子どもの能力を伸ばしはしないし、そうであれば子どもにとっての利益になるものではない。

【60】現在の治療実践は言語政策上の態度表明でもある

Vakiintunut sisäkorvaistutehoitokäytänne on myös painava kielipoliittinen kannanotto: pikkuhiljaa vakiintunut hoitokäytänne ei kunnioita viittomakielen perustuslaillista asemaa.

■ 語句・文法

vakiintunut「定着しているような」能過分 < vakiintua / sisä-korva-istute-hoito-käytänne「人工内耳による治療実践」 / painava「重い、重大な」能現分 < painaa / kannan-otto「意見表明」(kannan[属]<kanta) / pikku-hiljaa「少しずつ、じょじょに」 / ei kunnioita「尊重しない」単3 現否 < kunnioittaa < kunnia / perustus-laillista「基本法上の、基本法における」[分]<-laillinen

●フィンランド語理解のための訳例

定着しているような|人工内耳による治療実践は|である|また|重い|言語政策の|意見表明|:少しずつ|定着してきた|治療実践は|尊重しない|手話言語の|基本法上の|地位を。

◎意識

〈これまでに〉定着している人工内耳を導入する治療実践はまた、言語政策上の重大な態度表明でもある:じょじょに定着してきた治療実践は〈手話言語を排除することにより〉手話言語がもつ基本法上の地位というものを尊重していないことになる。

★補足

「手話言語がもつ基本法上の地位」については、【11】【12】【16】【36】などを確認してください。

【61】子どもの将来は未知、それならケイパビリティを最大化するのが当然の目標

Koska lapsen tulevaisuus on tuntematon, perheen kannattaa valita tavoitteet, jotka maksimoivat tulevaisuudessa lapsella olevat kyvykkyydet.

■語句・文法

tuntematon「知らないような、未知の」否分 < tuntea / perheen kannattaa valita「家族は選ぶべきである」(kannattaa「すべきである、する価値がある」は valita のような A 不定詞をしたがえませんが、主語に相当する語は perheen のように属格になります) / tavoitteet「目的を、目標を」[複主対]<tavoite < tavoittaa / maksimoida「最大化する」 / lapsella olevat「子どものところにあるような、子どもがもつような」(olevat[複主対]<oleva 能現分 < olla)

●フィンランド語理解のための訳例

[なぜなら|子どもの|未来は|未知である]、|家族にとっては|すべきである|選ぶ|目標を、|それらは|最大化する|未来において|[子どものところに|あるような|ケイパビリティを]。

◎意識

子どもの将来を知ることはできないのであるから、将来において子どものもつケイパビリティを最大化するような目標というものを〈ろう児をもつ〉家族は選択すべきである。

★補足

人工内耳と手話話者の問題について考えてきました。それでは、手話話者たちが抱える大きな問

題をみていきましょう。

【62】手話言語話者である子どもたちの幼児教育に対する権利は脅かされている

Viittomakielisten lasten oikeus saada varhaiskasvatusta omalla äidinkiellään on noussut esille muun muassa eduskunnan varhaiskasvatuslaista antamassa lausumassa ja eduskunnan oikeusasiamiehen lausunnossa varhaiskasvatuslain muuttamisesta.¹⁵⁶

◇原注(文中で言及されている参考文献など)

156 Eduskunnan vastaus EV 67/2018 vp - HE 40/2018 vp.; HE 148/2021 vp, s. 29.

■ 語句・文法

varhais-kasvatusta「幼児教育を、初期教育を」[分]< -kasvatus/äidin-kiellään「(自らの)母語により」[接]+ 複 3 所接 < -kieli/nousta esille「現れる、取り上げられる、明らかになる」/eduskunnan「国会の」[属]< -kunta/varhais-kasvatus-laista「幼児教育法について」[出]< -laki/anatamassa lausumassa「与えたような声明において」[内]< antamassa lausuma (antama 動分 < antaa, lausuma < lausua) /oikeus-asia-miehen「オンブズマンの」[属]< -mies(「国会のオンブズマン」とは、公的機関の活動が法に合致しているものとなっているのか、あるいは人権が保障されているのかなどを監視・促進する役割を担っています。) /lausunnossa「声明において」[内]< lausunto < lausua /varhais-kasvatus-lain「幼児教育法の」[属]< -laki/muuttamisesta「変えることについて、改正について」[出]< muuttaminen 動名 < muuttaa

● フィンランド語理解のための訳例

手話言語話者である|子どもたちの|権利|受ける|幼児教育を|自分の|自らの母語により|上がってきた|前へ|なかでも|国会の|幼児教育法について|与えた|声明において|そして|国会の|オンブズマンの|声明において|幼児教育法の|変えることについて。

◎ 意訳

手話言語話者である子どもたちが自らの母語によって幼児教育を受ける権利は、なかでも幼児教育法について国会が表明して声明や、幼児教育法の改正についての国会オンブズマンによる声明の中で取り上げられてきた。

【63】手話言語による教育がもっともっと必要だ

Viittomakielten opetusta kaivataan enemmän. Viittomakielten tai viittomakielisen opetuksen saamiseen vaikuttavat kuntien taloudelliset resurssit. Kuntien käytännöt opetuksen järjestämisessä vaihtelevat. Viittomakieltä ei mainita asetuksessa, jonka nojalla kunta voi saada valtionavustusta perusopetusta täydentävään opetukseen.

■ 語句・文法

kaivataan「望まれる、求められる」受現 < kaivata / saamiseen「受けることへ」[入] < saaminen 動名 < saada / kuntien「(基礎)自治体の」[複属] < kunta / käytännöt「実践」[複主] < käytäntö / järjestämisessä「催すことにおいて」[内] < järjestäminen 動名 < järjestää / vaihtelevat「異なる、さまざまである」複3 現 < vaihdella < vaihtaa / ei mainita「挙げられない、言及されない」受現否 < mainita / asetuksessa「省令において」[内] < asetus (ここでの asetus「省令」とは2009年に教育省より出されたもので、基礎教育を補助する教育活動に対する国庫補助の基準を定めています。) / jonka nojalla「それに則って」 / valtion-avustusta「国家補助金を」[分] < avustus / täydentävään opetukseen「補うような教育へ、補助教育へ」[入] < täydentävä opetus (täydentävä 能現分 < täydentää < täysi)

● フィンランド語理解のための訳例

手話言語の|教育を|求められる|より多く。手話言語の|あるいは|手話言語により|教育の|受けることへ|影響する|(基礎)自治体の|経済的な|資源が。(基礎)自治体の|実践は|教育の|催すことにおいて|異なっている。手話を|挙げられない|省令において、|その|よりかかって|(基礎)自治体は|できる|受ける|国家補助を|[基礎教育を|補うような|教育へ]。

◎ 意訳

手話言語の教育がより多く求められている。手話言語の、あるいは手話言語による教育を受けられるかどうかに対しては、各自治体の財源が影響している。〈そのため〉各自治体がどのように〈手話言語の／におる〉教育を実施しているのかには大きな違いが存在する。また、基礎教育を補助する教育〈活動〉のための国庫補助金を得るために各自治体がしたがうべき省令においては、手話言語には言及されていない。

【64】手話言語話者の生徒を特定することも難しい

Viittomakieliset lapset ja nuoret asuvat hajallaan, mikä vaikeuttaa opetuksen saamista. Myös oppimisympäristöllä on keskeinen merkitys viittomakieliselle lapselle tai nuorelle. Viittomakielisiä oppilaita ei aina tunnisteta. Ei esimerkiksi aina tiedetä, käyttääkö oppilas viittomakieltä vai tukiviittomia.¹⁵⁷

◇原注(文中で言及されている参考文献など)

157 Selin-Grönlund, P., Rainò, P., Martikainen, L. (2014).; AVI:n selvitys perusopetuksen tilanteesta

■ 語句・文法

hajallaan「散らばって、ばらばらに」= hajalla ⇒ hajalleen, hajalle / mikä「そのことが」(mikä は前の節の内容を受ける関係詞) / vaikeuttaa「難しくさせる」 < vaikea / saamista「受けることを」[分] < saaminen 動名 < saada / oppimis-ympäristöllä「学習環境には」[接] < -ympäristö (oppimis- < oppiminen 動名 < oppia) / keskeinen merkitys「中心的な意味、重要な意味」 / ei tunnisteta

「認識されない、特定されない」受現否 < tunnistaa / ei tiedetä 「知られない」受現否 < tietää / tuki-viittomia 「補助サインを」[複分] < -viittoma (tuki-viittoma とは発話を補助するために使われるサインのことで、音声により発話をしながら使用されるもののことです。そのため独立した言語である本来の viittoma-kieli とは大きく異なるものです。)

●フィンランド語理解のための訳例

手話言語話者である | 子どもたちは | そして | 若者たちは | 住んでいる | 散らばって、 | それは | 難しくさせる | 教育の | 受けることを。また | 学習環境に | ある | 中心的な | 意味が | 手話言語話者である | 子どもたちへ | そして | 若者たちへ。手話言語話者である | 生徒たちは | 認識されない | つねには。たとえば | つねには | 知られない、 | 使うのかどうか | 生徒は | 手話言語を | それとも | 補助サインを。

◎意訳

手話言語話者である子どもや若者は各地に居住しており、それにより〈手話言語の／による〉教育を受けることは困難となっている。手話言語話者である子どもたちや若者たちにとっては、学習環境もまた非常に重要な意味をもつ。〈さらに〉手話言語話者である子どもはつねに特定されるとは限らない。たとえば、生徒が手話言語を使用するのか〈音声言語を使用するために〉補助サインを使用するのかが、つねに明らかになるわけではない。

★補足

日本には「日本手話」と「日本語対应手話」の二つがあるといわれることがあります。ただし「日本語対应手話」はあくまでも手話言語のサインを活用して表現される日本語のことですので、「手話(言語)」と呼ぶのは適切ではありません。こちらはむしろ「手指日本語」と呼ぶべきかもしれません。たとえば、フィンランド語にも viitottu suomi という表現がありますが、これも音声言語であるフィンランド語をサインを使って表現しようとするものです(そのため、viittoma-kieli とは呼ばれていません)。

【65】母語として登録できるのはたった一つの言語

Oppilaiden tunnistamista hankaloittaa osaltaan mahdollisuus rekisteröidä vain yksi kieli äidinkieleksi, sillä viittomakieliset oppilaat ovat usein monikielisiä. Koska coda-lapsi kuulee, hän ei ole oikeutettu viittomakieliseen opetukseen eikä viittomakielen opetukseen äidinkielenä perusopetuksessa.

■語句・文法

tunnistamista 「認識することを、特定することを」[分] < tunnistaminen 動名 < tunnistaa / hankaloittaa 「困難にする、面倒なものにする」 < hankala / osaltaan 「一方で」[奪]+ 単 3 所接 < osa / rekisteröidä 「登録する」 / äidin-kieleksi 「母語として」[変] < -kieli / moni-kielisiä 「多言語(話者)の」[複分] <

-kielinen / oikeutettu 「権利・資格を与えられて、正当化されて」受過分 < oikeuttaa < oikea

●フィンランド語理解のための訳例

生徒たちの|特定することを|困難にする|一方で|可能性が|登録する|ただ|一つの|言語を|母語として、|というのも|手話言語話者である|生徒たちは|である|しばしば|多言語話者の。[なぜなら|コーダ児童は|聞こえる]、|その子どもは|権利を与えられていない|手話言語による|教育へ|そして(権利を与えられてい)ない|手話言語の|教育へ|母語として|基礎教育において。

◎意訳

母語として〈人口情報システムに〉一つの言語しか登録できないために、〈手話言語話者である〉生徒たちを特定することはまた難しいものとなっている。なぜなら、手話言語話者である子どもたちはしばしば多言語話者であるからである。〈たとえば〉コーダ児童は聞こえるために、基礎教育において手話言語による教育や、あるいは母語としての手話言語の教育に対する権利を認められていない。

【66】手話言語話者である子どもや家族の置かれた状況は多様である

Viittomakielisten lasten ja perheiden tilanteet ja tarpeet ovat hyvin moninaisia. Kuuroista lapsista suurin osa syntyy kuuleville vanhemmille eli perheisiin, joissa ei ennestään osata viittomakieltä. Jyväskylän yliopiston toteuttaman selvityksen mukaan lähes 50 prosenttia kuulovammaisten lasten vanhemmista koki oman viittomakielen taitonsa huonoksi tai olemattomaksi.¹⁵⁹

◇原注(文中で言及されている参考文献など)

159 Tutkijatohtori Laura Kanto, kielipoliittisen ohjelman valmisteluryhmän kuuleminen 15.10.2021. Viittomakieltä omaksuvien lasten kielitaidon arviointi, kartoitus ja tukitoimenpiteet (VIKKE) -hanke: <https://vikke.nmi.fi>.

■語句・文法

tilanteet ja tarpeet「状況や必要性は」[複主]〈tilanne ja tarve/moni-naisia「多様な、多彩な」[複分]〈moni-nainen/perheisiin「家族へ」[複入]〈perhe/ei osata「できない」受現否〈osata/ennestään「以前から、事前に」⇒ ensi, ennen/toteuttaman「実現したような、実施したような」[属]〈toteuttama 動分〈toteuttaa/selvityksen「調査の、報告書の」[属]〈selvitys〈selvittää〈selvä/kuulo-vammaisten「聴覚障害の」[複属]〈-vammainen/koki「経験した、感じた」単3過〈kokea/taitonsa「(自らの)技能を、(自らの)能力を」[属対]+単3所接〈taito/olemattomaksi「ないものだと、存在しないものだと」[変]〈olematon 否分〈olla

●フィンランド語理解のための訳例

手話言語話者である|子どもたちの|そして|家族たちの|状況は|そして|必要性は|である|とても|多様で。ろうである|子どもたちのうち|最大の|部分は|生まれる|聞こえるような|両親へ|つまり|家族へ、|そこでは|事前に|できない|手話言語を。Jyväskylä の|大学の|実施したような|報告書の|よれば|ほぼ|50 パーセントは|聴覚障害者である|子どもたちの|両親のうち|経験した|自分の

|手話言語の|能力を|悪いものだと|あるいは|ないものだと。

◎意識

手話言語話者である子どもたちや家庭の状況や必要性というものは非常に多様なものとなっている。ろうである子どもの大部分は聞こえる親や家庭へ、つまり事前には手話言語ができないような親や家庭へ生まれてくるのである。Jyväskylä 大学の実施した調査によれば、聴覚障害児をもつ親のうちほぼ 50 パーセントは、自らの手話言語能力が低い、あるいは存在しないと感じていた。

【67】遠隔授業の活用は重要な意味をもつかもしい

Suomenruotsalaisella viittomakielellä opetus- ja koulutusmahdollisuudet ovat vähäiset ja lisää tukea tarvittaisiin. Yksittäisiä toimia on toteutettu, mutta pysyvyys puuttuu. Etäyhteyksiä hyödyntävän opetuksen mahdollisuudet olisivat tärkeitä, sillä oppilaat asuvat todella hajallaan.

■語句・文法

opetus- ja koulutus-mahdollisuudet「教育や訓練の可能性は」[複主]< mahdollisuus/vähäiset「わずかな、少ない」[複主]< vähäinen/lisää「追加して、より多く」/tarvittaisiin「必要とされるだろう」[条]受現 < tarvita/yksittäisiä toimia「個々の行動を、個々の対策を」[複分]< yksittäinen toimi (yksittäinen < yksittäin < yksi) /on toteutettu「実現されている」受完 < toteuttaa/pysyvyys「永続性、継続性」< pysyvä 能現分 < pysyä/puuttua「欠けている」/etä-yhteyksiä「遠隔接続を、リモートのつながりを」[複分]< -yhteys < yksi/hyödyntävän opetuksen「活用するような教育の」[属]< hyödyntävä opetus (hyödyntävä 能現分 < hyödyntää < hyöty)

●フィンランド語理解のための訳例

スウェーデン語系フィンランドの|手話言語により|教育・|そして|訓練の可能性は|少ない|そして|さらに|支援を|必要とされるだろう。個々の|対策を|実現してきた、|しかし|継続性は|欠けている。遠隔接続を|活用するような|教育の|可能性は|であろう|重要な、|というも|生徒たちは|住んでいる|実に|ばらばらに。

◎意識

スウェーデン語系フィンランド手話言語による教育や訓練の可能性というものはわずかであり、さらなる支援が必要とされるだろう。個々の対策は実施されてきているが、持続性というものが欠けている。遠隔接続を活用するような教育の機会が重要なものとなるだろう。なぜなら、〈スウェーデン語系フィンランド手話言語を話す〉生徒たちは各地に居住しているからである。

★補足

それでは最後に「言語」という視点に立ち戻って、この資料をまとめることにします。

【68】聞こえる親の元に生まれるろう児が大多数

Suurin osa viittomakielisistä lapsista syntyy kuuleville vanhemmille. Näin ollen lapsi ei automaattisesti synny perheeseen, jossa olisi kielitaitoa siirtää viittomakieltä seuraavalle sukupolvelle ja resursseja antaa lapselle pääsy kieliyhteisöön.

■ 語句・文法

näin ollen「そのため、こうであるので」(ollen e 不[具]< olla) / automaattisesti「自動的に」[副]
< automaattinen / kieli-taitoa「言語能力」[分]< -taito / seuraavalle suku-polvelle「次の世代へ」
[向]< seuraava suku-polvi / pääsy「入ることを、アクセスを」[主対]< päästä

● フィンランド語理解のための訳例

最大の|部分は|手話言語話者である|子どもたちのうち|生まれる|聞こえるような|両親へ。その
よう|であるので|子どもは|自動的に|生まれない|家族へ、|そこには|あるだろう|言語能力が|移
すための|手話言語を|次の|世代へ|そして|資源がくあるだろう>|与えるための|子どもへ|入るこ
とを|言語共同体へ。

◎ 意訳

手話話者である子どもたちの大部分は聞こえる両親のもとへ生まれる。そのため、手話言語を次の世代に受け継ぐような言語能力があり、また子どもに〈手話〉言語共同体へ加わる機会を与える資源のあるような家庭に、子どもたちは自動的に生まれるわけではない。

【69】支配的な言語観は依然として「音声を使う」ということにもとづいている

Yhteiskunnan vallitseva kielikäsitys perustuu ajatukselle kielen äänellisyydestä – normi on ohjeistaa jo lapsia välttämään osoittelua.

Kun pidämme kielen äänellisyyttä poikkeuksettomana tosiseikkana, tuomme kuitenkin samalla esiin asenteellisuutta, jolla on vaikutusta viittomakielisten ihmisten jokapäiväiseen arkeen.

■ 語句・文法

keili-käsitys「言語(についての)理解、言語観」 / perustua「もとづく」 / ajatukselle「考え方へ」[向]
< ajatus / äänellisyydestä「音声性について、音にもとづくものだということについて」[出]
< äänellisuus < äänellinen < ääni / normi「規範」 / ohjeistaa「指導すること、導くこと」 / välttämään
「避けるように」MA 不[入]< välttää / osoittelua「指さしを、(指で)指し示すことを」[分]
< osoittelu < osoitella < osoittaa / pidämme「我々がみなす」複 1 現 < pitää (+[分]+[様]) /
poikkeuksettomana tosi-seikkana「例外のない真実として」[様]< poikkeukseton tosi-seikka
(poikkeukseton < poikkeus < poiketa) / tuoda esiin「提示する、表明する」 / asenteellisuutta「思
い込みを、偏見を、姿勢を」[分]< asenteellisuus < asenteellinen < asenne

●フィンランド語理解のための訳例

社会の|支配的な|言語理解は|もとづく|考え方へ|言語の|音にもとづくものだということについて|規範は|である|導くこと|すでに|子どもたちを|避けるように|指さしを。

[ときに|我々がみなす|言語の|音にもとづくものであるということを|例外のない|真実だと]、|我々はもってくる|しかしながら|同時に|前へ|思い込みを、|それには|ある|影響が|手話言語話者の|人々の|毎日の|日常へ。

◎意訳

社会において支配的となっている言語観というものは、言語が音にもとづくものがあるという考え方にもとづいている—〈そのため〉規範となっているのは、すでに子どもたちに指さしを避けるよう指導することである。

言語は音にもとづくものであるということを例外のない真実だと我々がみなすとき、それは同時に手話言語話者たちの日々の生活に影響をおよぼすような偏見を表明していることになる。

【70】そのような言語観は手話言語に対する権利を否定する

Äärimmillään tämä voi muuttua yhteiskunnan rakenteisiin sisäänkirjoitetuksi pakoksi kuulla, jonka seurauksena esimerkiksi kuuroilta lapselta kielletään oikeus viittomakieleen. Näin tapahtuu usein esimerkiksi terveydenhoidossa, jossa leikkauksella asennettava sisäkorvaistute ja siihen kytketty puheopetus nähdään ainoana vaihtoehtoina kieleen ja sen hallintaan.

■語句・文法

äärimmillään「極端な場合に」⇒ ääri／rakenteisiin「構造へ」[複入] < rakenne < rakentaa／sisään-kirjoitetuksi「書き込まれたような」[変] < -kirjoitettu 受過分 < kirjoittaa／pakoksi「強制へ」[変] < pakko／jonka seurauksena「その結果として」(seurauksena [様] < seuraus < seurata)／kielletään「禁じられる、否定される」受現 < kieltää／terveyden-hoidossa「保健医療事業において」[内] < -hoito／asennettava「設置されるような」受現分 < asentaa／kytketty「結びつけられるような」受過分 < kytkeä／puhe-opetus「発話教育」／nähdään「みなされる」受現 < nähdä (+ [様])／ainoina vaihto-ehtoina「唯一の選択肢として」[複様] < ainoa vaihto-ehto／hallintaan「支配へ、統治へ、(活用する)能力へ」[入] < hallinta < hallita

●フィンランド語理解のための訳例

極端な場合には|これは|ありうる|変わる|社会の|構造へ|書き込まれたような|強制へ|聞くことへの|、その|結果として|たとえば|ろうである|子どもからは|禁じられる|権利を|手話言語へ。このように|起こっている|しばしば|たとえば|保健医療事業において、|そこで|手術により|設置されるような|人工内耳を|そして|それへ|結びつけられるような|発話教育を|みなされる|唯一の|選択肢として|言語へ|そして|その|能力へ。

◎意識

このことは極端な場合には、社会構造へ書き込まれた「聞こえなければならない」という強制へと変化する可能性があり、その結果として、たとえば、ろうの子どもは手話言語に対する権利を否定されることになる。たとえば医療においてはしばしばこのようなことが起こっており、そこでは手術により埋め込まれる人工内耳と、それと結びついた発話訓練とが言語とその能力に対する唯一の選択肢だとみなされている。

★補足

依然として「言語」＝「音声」という思い込みが支配的ですが、それは必然的に「手話は言語ではない」という結論を導き出します。そのことが手話言語話者たちにどのような影響を与えるのか考える必要があるでしょう。

【71】さまざまな選択肢に関する情報を提供することが重要なはずだ

Viittomakielisten lasten perheet tarvitsevat enemmän tietoa eri vaihtoehtoista, kuten mahdollisuuksista oppia viittomakieltä ja saada viittomakielen opetusta. Esimerkiksi sopeutumisvalmennuksena annettava viittomakielen opetus perheille on tärkeää. Käytännössä opetusta ei yleensä myönnetä perheille lääkärinlausunnon perusteella.

■語句・文法

vaihto-ehdoista「選択肢について」[複出]< -ehto / sopeutumis-valmennuksena「(障害者と家族のための) 適応訓練として」[様]< -valmennus (sopeutumis- < sopeutuminen 動名 < sopeutua、valmennuksena [様]< valmennus < valmentaa < valmis) / annettava「与えられるような」受現分 < antaa / ei myönnetä「認められない」受現否 < myöntää / lääkärin-lausunnon「診断書の、医師の意見書の」[属]< -lausunto / perusteella「もつについて」

●フィンランド語理解のための訳例

手話言語話者である|子どもたちの|家族は|必要とする|より多く|情報を|さまざまな|選択肢について、|[のような|可能性について|学ぶための|手話言語を|そして|受けるための|手話言語の|教育を]。たとえば、適応訓練として|与えられるような|手話言語の|教育は|家族にとって|重要である。現実には|教育は|一般的に|認められない|医師の診断書の|もつについて。

◎意識

手話言語話者の子どもがいるような家族は、たとえば手話言語を学び、手話言語の教育を受ける可能性についてなど、さまざまな選択肢についてより多くの情報を必要としている。たとえば〈障害者とその家族のための〉適応訓練として行われる手話言語の教育は家族にとって重要なものとなる。〈しかし〉医師の診断書にもつについて〈手話言語の〉教育が認められることは現実にはふつうない。

【72】医師は言語の専門家ではない、ということを確認すべきだ

Asiantuntijayhteiskunnassa kieltä koskevia päätöksiä olisi tärkeää olla tekemässä riittävän laaja ~~joukkoa~~ **joukko** asiaa tuntevia henkilöitä. Kuten kielitieteen edustaja ei ole automaattisesti asiantuntija lääketieteen asioissa, ei myöskään lääketieteen edustaja ole automaattisesti asiantuntija kieliasioissa.

■ 語句・文法

asian-tuntija-yhteis-kunnassa「専門家社会で」[内]< -kunta / koskevia「かかわるような」[複分]< koskeva 能現分 < koskea / päätöksiä「決定を」[複分]< päätös < päättää (この koskevia päätöksiä は後から出てくる olla tekemässä の目的語になるのだと思います) / olla tekemässä「しようとしていることは」(tekemässä MA 不[内]< tehdä) / riittävän「十分に」[属]=[副]< riittävä 能現分 < riittää / joukkoa となっていますが、正しくは joukko ではないかと思います / laaja joukko asiaa tuntevia henkilöitä「事柄をよく知っている人物たちの広範な集団」(tuntevia [複分]< tunteva 能現分 < tuntea、henkilöitä [複分]< henkilö.joukko「集団」のような語は分格をしたがえます。) / 最初の文の構造が私にはよく理解できません。olisi tärkeää「重要だろう」が述語ですが、それに対する主語は olla tekemässä「しようとしていること」だと思っています。そして kieltä koskevia päätöksiä「言語にかかわるような決定を」は olla tekemässä の目的語に当たり、文頭の asiantuntija-yhteis-kunnassa「専門家社会において」は副詞句となっており、まとめると「専門家社会においては言語にかかわるような決定をしようとするのが重要だろう」となるでしょう。そうすると最後の riittävän laaja ~~joukkoa~~ **joukko** asiaa tuntevia henkilöitä「事柄をよく知っている人々の十分に広範な集団」を文法的にどう位置づければよいのか疑問です。文の意味そのものは十分に理解できるのですが、フィンランド語としての構造が理解できません。 / kieli-tieteen「言語学の」[属]< -tiede < tietää / edustaja「代表者」< edustaa / asioissa「物事において、事柄において」[複内]< asia / myös-kään「また〜も (... ない)」 / lääke-tieteen [属] < -tiede

● フィンランド語理解のための訳例

専門家社会で | 言語に | かかわるような | 決定を | 重要である | 行おうとするのが | 十分に | [広範な | 集団が | 事柄を | よく知っているような | 人物たちの]。 [ように | 言語学の | 代表者が | ではない | 自動的に | 専門家 | 医学の | 事柄において]、 | ではない | また | 医学の | 代表者は | 自動的に | 専門家 | 言語の事柄において。

◎ 意訳

専門家社会においては、言語にかかわる決定は〈言語の〉問題をよく知っている人々の広範な集団によって行われることが重要だろう。言語学を代表する者が自動的に医学の問題における専門家ではないのと同様に、医学を代表する者もまた自動的に言語の問題における専門家となるわけではないのである。

★補足

ろう者について考えるときに「障害」という視点と「言語」という視点があることを確認しました。日本においてもそうですが、フィンランドにおいても前者の視点が大きく力をもつようになっているようです。そのために、「医学」がすべてを決定するという状況が生まれています。ただし、言語学者たちが医学については素人であるのと同様に、医師たちの多くも言語について必ずしも深い知識をもっているわけではなさそうです。それでも医師たちの考えが優先され手話言語が排除される背景には、人文系（そして社会系）の学問に対する否定的な態度があるように思えてなりません。ろう者や手話話者という「人間」について考えるときに何よりも優先されるべきは、「人間についての学問」ではないかと私には思えるのですが。

◆出典

【1】【2】【3】【4】【19】【20】【21】【69】【70】【72】:

Jantunen, Tommi. 2022. ”Viittomakieli pakottaa arvioimaan yhteiskunnan vallitsevaa kielikäsitystä”. Jyväskylän yliopisto.

<<https://www.jyu.fi/fi/artikkeli/viittomakieli-pakottaa-arvioimaan-yhteiskunnan-vallitsevaa-kielikasitysta>>

[2024年8月28日最終閲覧]

【5】【6】:

”Viittomakieliset”. Kuurojen liitto.

<<https://kuurojenliitto.fi/viittomakieliset/>>

[2024年8月28日最終閲覧]

【7】【10】【11】【15】:

”Viittomakielen päivät 12.2. ja 23.9.”. Ihmisoikeuskeskus.

<<https://www.ihmisoikeuskeskus.fi/ihmisoikeuskoulutus/tietoa-ja-materiaaleja-teemoitta/viittomakielen-paivat-12-2-ja-23/>>

[2024年8月28日最終閲覧]

【8】【9】【36】【38】【39】【40】【41】【42】:

Ulkoasiainministeriö. 2023. Suomen kuudes määräaikaisraportti alueellisia kiellä tai vähemmistökieliä koskevan eurooppalaisen peruskirjan täytäntöönpanosta.

<https://um.fi/documents/35732/o/ECRML_VI_raportti_2023.pdf/a9931649-8f55-27f5-f41b-fa762db75b68?t=1688463937044>

【8】【9】【36】¹² ページ、【38】【39】【40】¹³ ページ、【41】¹⁴ ページ、【42】¹³ ページ

【12】【18】:

”Viranomaisille”. Kuurojen liitto.
<<https://kuurojenliitto.fi/viranomaisille/>>

[2024 年 8 月 28 日最終閲覧]

【13】【14】【17】【22】【23】【24】【25】【26】【37】【43】【44】【45】【46】【47】【48】【49】
【50】【51】【62】【63】【64】【65】【66】【67】【68】【71】:

Kielipoliittinen ohjelma. Valtioneuvoston periaatepäätös (2022). Valtioneuvoston julkaisuja
2022:51. Helsinki: Valtioneuvosto.
<<http://urn.fi/URN:ISBN:978-952-383-645-7>>

【13】33 ページ、【14】34 ページ、【17】20 ページ、【22】【23】【24】21 ページ
【25】【26】22 ページ、【37】18 ページ、【43】7 ページ、【44】28 ページ
【45】【46】【47】53 ページ、【48】50 ページ、【49】53 ページ、【50】67 ページ
【51】52 ページ、【62】【63】【64】【65】51 ページ、【66】【67】52 ページ、【68】69 ページ
【71】52 ページ

【16】:

”Suomen kielisäädäntö”. Kotimaisten kielten keskus.
<https://www.kotus.fi/kielitieto/kielipolitiikka/suomen_kielilainsaadanto>

[2024 年 8 月 28 日最終閲覧]

【27】:

”Suomenruotsalaisen viittomakielen voi ilmoittaa nyt äidinkielekseen
väestötietojärjestelmään”. 2021. Digi- ja väestötietovirasto.
<[https://dvv.fi/-/ruotsinkielisen-viittomakielen-voi-ilmoittaa-nyt-aidinkielekseen-
vaestotietojarjestelmaan](https://dvv.fi/-/ruotsinkielisen-viittomakielen-voi-ilmoittaa-nyt-aidinkielekseen-vaestotietojarjestelmaan)>

[2024 年 8 月 28 日最終閲覧]

【28】:

”Viittomakielinen yhteisö”. Kuurojen liitto.
<<https://kuurojenliitto.fi/viittomakielinen-yhteiso/>>

[2024 年 8 月 28 日最終閲覧]

【29】:

Rainò, Päivi & Gun-Viol Vik. 2020. *Tulkkausalan tulevaisuudennäkymät*. Humanistinen ammattikorkeakoulu.

<<https://www.humak.fi/wp-content/uploads/2020/10/Raino%CC%80-ja-Vik-tulkkausalan-tulevaisuudennakymat-2020-humak-diak.pdf>>

【29】₃₃ ページ

【30】【31】:

”Hätäilmoitus viittomakielellä”. *Kela*.

<<https://www.kela.fi/hatailmoitus-viittomakielella>>

[2022 年 4 月 10 日最終閲覧]

【32】【33】【34】【35】:

”Hätäilmoitus viittomakielellä -kokeilu päättyy vuoden 2023 lopussa”. 2023. *Hätäkeskuslaitos*.

<<https://112.fi/-/hatailmoitus-viittomakielella-kokeilu-paattyy-vuoden-2023-lopussa>>

[2024 年 8 月 28 日最終閲覧]

【52】【53】【54】【55】【56】【57】【58】【59】【60】【61】:

Nikula, Karoliina. 2015. *Lapsen hyvää edistämässä: Syntymäkuurojen lasten sisäkorvaistutehoitokäytännön sosiaalietistä tarkastelua*. Helsingin yliopisto.

<<https://helda.helsinki.fi/items/62902eed-89e8-4100-a437-a223db9c27f5>>

【52】₃₁₂ ページ、【53】₇ ページ、【54】₃₁₂ ページ、【55】₃₁₃₋₃₁₄ ページ、【56】₃₁₂ ページ

【57】₈ ページ、【58】₃₁₁ ページ、【59】₃₁₃ ページ、【60】₃₁₂ ページ、【61】₃₁₅₋₃₁₆ ページ